

不落の城

茅々斎かちかち 著

**帝王**は天を継ぐ子にして、徽(うつく)しく赫(あか)るきこと天と連なる。よつて我が姓を赫連(かくれん)とする。

劉勃勃(りゅうぼつぼつ)はこのように宣言し、皇帝になった。その帝位は、天に連なつて永劫に続くはずであったが、子の昌からその弟の定へと継がれただけで絶えた。史家は「神器を弄ぶといえども、なお凶渠(きようきよ)といふべし」と評した。赫連勃勃は皇帝になったとはいえ、ならず者の頭目すぎなかつたというのである。それでも、勃勃の築いた城が、千七百年後の現在もなお威容を誇っているのは、あるいは何かしら天の意にかなうところがあったからなのだろうか。

**勃勃**には一つの記憶があった。

血まみれの女が真っ直ぐに視線を向けて何かを叫んでいる。その次の瞬間に、大きな衝撃を受け、中空に跳ね上げられる。いつのことであったのかは

わからないが、思い出せる限り最も古い記憶であるようだ。

その女が母だったのではないかとの疑いが生じたのは十歳のときだった。

勃勃が生きたのは飛び切りの乱世だ。五つの胡族（こぞく）が華北に次々に国を建て、目まぐるしい興亡劇を繰り広げた。いわゆる五胡十六国（ごこじゅうろくこく）の時代である。胡とは、中国から見て北のあたりに暮らす漢族以外の民で、五胡は、匈奴（きょうど）、羯（けつ）、鮮卑（せんび）、氐（てい）、羌（きやう）を指す。勃勃は匈奴だった。

匈奴は長期間にわたって強大な勢力を張り、勃勃より六百年余の昔、漢の高祖である劉邦（りゅうほう）は、匈奴を手なずけるため、皇族の娘を匈奴の王に嫁がせた。その娘の子孫は漢王朝を尊び、母の姓である劉を代々名乗った。勃勃はその末裔である。

勃勃の曾祖父を劉武（りゅうぶ）という。劉武の一族に劉淵（りゅうえん）がいた。永興（えいせい）三年（三〇四）年に劉淵は漢と称する国を興した。古の大漢帝国の再現を夢見たのだ。劉武は、劉淵の息子の劉聰（りゅうそう）の世に楼煩公（ろうぼんこう）

はんこうに封じられた。

勃勃の祖父を劉豹子（りゅう ひょうし）という。劉豹子は石勒（せき ろく）が建てた趙（ちょう）国の二代皇帝の石虎（せき こ）に仕え、丁零単于（ていれいぜん）の称号を授けられた。石勒、石虎も匈奴だった。

勃勃の父を劉衛辰（りゅう えいしん）という。劉衛辰は符堅（ふ けん）に仕えて西単于の称号を受けた。符堅は氏族で、大秦国を兄より引き継ぎ、諸胡を次々に支配下に組み入れて北中国を一つにまとめた。当時、長江流域を中心とする南中国には漢人の国家である晋（しん）があった。符堅は天下統一を目指し、兵卒六十万、騎兵二十七万と号する大軍を率いて南征の途に上った。対する晋は、淝水（ひすい）において、わずか五千で迎え撃った。一戦を交えるや、九十万の大軍は瓦解し、符堅は命からがら長安に逃げ帰った。

北中国はたちまち分裂し、劉衛辰は三万八千の兵士を率いて朔方（さくほう）の地において独立した。朔方とは、東流する黄河が大きく北に張り出した黄土高原の北部地帯である。劉衛辰は順調に勢力を拡大し、黄河をはさんだ東

側で領土を拡張しつつあった魏国と衝突するようになった。魏は鮮卑族の国である。太元十六（三九二）年秋、劉衛辰は息子に八万の兵を与えて魏国に攻め入らせた。ところが、数では遙かに優りながら大敗し、逆に、魏軍が黄河の西側に攻め入った。

このとき勃勃は、老人、女、子どもを避難させた谷の入り口を守る部隊の中にいた。まだ十歳を超えたばかりではあっても、ずば抜けて大きな体で、馬上に矛を構える姿は大人に見劣りしなかった。

勃勃少年は胸にざわめきを覚え、一人谷を離れ、南の丘に登る。

東方に土煙が昇る。少年は不意に知る。

——我等は敗れた。父も兄も死んだ。

そうとわかって胸のざわめきはおさまる。

——こうなるはずだった。

不思議な落ち着きを得て丘を下る。

味方の一人が猛然と駆けて来る。

「裏切り者が出た。皆を逃がさねば。とにかく早く」。

男は、付いて来いと、少年に腕を振り、馬に鞭を当てる。

反射的に踏み出そうとして、

——どうして行くのだ。

少年は馬を止める。

——いまなら一人になれる。

そう思うと、心に喜びが湧く。悲しみも恐怖もない。

——どこへだつて行ける。

左右を見回す少年の前に、血まみれの女が現れる。

「どちらに行けばいいのですか」。

女は西方を示す。

馬首をそちらに向けると、女はほほえみを残して消える。

——母だ。母はあのとときに殺された。自分も殺されかけた。あの連中はいら

ない。やっと本当に生きられる。

**魏**国が劉衛辰を憎むことはなほだしく、劉衛辰の一族五千余人を殺して、遺骸を黄河に投げ棄てた。三十余万頭の馬、四百余万頭の牛羊を奪って魏軍は凱旋した。胡族にとって馬は軍事力の、牛羊は経済力の源泉で、魏国はこの一戦を境に強国への道を歩み出した。

勃勃少年は、草原を往還する叱干部（しっかんぶ）の人々に出逢った。叱干部は鮮卑の一部族であるが、鮮卑族は部族間の抗争が激しく、魏国との関係はよくなかった。叱干部を率いる他斗伏（たどぶく）には、かつて劉衛辰に助けられた恩義がある。

勃勃少年は己の運命を叱干部に委ね、他斗伏は保護の手を差し伸べた。ところが、魏国が劉衛辰の一族を皆殺しにしたと聞きくと、他斗伏はにわかに態度を改め、少年を縛って魏国に送ろうとする。

少年の体に縄目が食い込む。

——こんなことで終わってはならない。母が示してくれたのが間違いのほ  
がない。

少年は他斗伏を睨む。

「いいのか、こんなことをして。後悔するぞ」。

「ふてぶてしい子どもだ。黙らせる」。

他斗伏は棒で叩かせる。

——絶対に間違っている。

少年は、この痛みは自分にはあつてはならぬものだと感じる。

——必ず思い知らせてやる。

他斗伏の甥の阿利（あり）が駆けつける。

「獵師は、自ら網に飛び込んで来た雀は助けてやると聞きます。この子は国  
が敗れ、家を失い、我々を頼って逃げて来たのです。ここで匿えないのなら、  
せめて遠く逃げるに任せてやるべきではありませんか。それを捕らえて敵に  
送るなど、仁者のすべきことではありません」。



阿利は武器を作る職人で、劉衛辰のもとに時折姿を見せていた。勃勃少年も顔くらいは知っている。親しく話をしたことは一度もない。どうしてわざわざ助けに来たのか理由はわからない。しかし、少年はそれを意外とは思っていない。

——これで終わるはずがない。

他斗伏は甥の言い分に耳を貸さない。

「一人の少年のために叱干部を危険にはさせせない。魏は昨日までの魏ではもはやない。魏との関係を少しでもよくせねば、我等も黄河に投げ込まれてしまう」。

他斗伏は少年を馬に括り付け、

「おまえが憎くてするのではない。わしを悪く思ってくれるな。おまえの父には恩がある。しかし、いまは力ある者には従わねば生きていけぬ世なのだ。わし一人の情ではどうすることもできない。せつかくここまで逃がれたのに、結局は父や兄と同じ最期となるのは残念であろう。魏国に連れて行かれるの

は恐ろしかろう。気の毒だが、あきらめてくれ。」

勃勃少年は卒然と言い放つ。

「恐ろしくありません。死など何でもありません。僕が逃げて来たのは、死ぬのが怖いからではありません。僕にはしなければならぬことがあるのです。天が授けたこの身を使わずじまいにしてはならないのです。天のためにこの命を惜しむのです。」

口から出たその言葉を自分で聞き、

——そうだ。天に授けられたのだ。

少年はそのまま確信する。

他斗伏は唾を吐き、

「何とも大胆なことを言う奴だ。生かしておいてろくなことになるまい。」

**勃勃**少年は、十人ほどの若い護送兵に囲まれて、魏に連れられる。

黄土高原は、中国の内地と比べ、はなはだ荒涼としている。砂漠から運ばれた黄色い土が厚く堆積する台地には水が乏しく、わずかな草木しかない。軟弱な台地は少しの流水でも深くえぐられて谷は深い。

死に向かつての少年の旅は、台地を一つ越えようと、谷へ下って水場にしばし憩い、また台地へ上ることの繰り返しだ。

「惜しいなあ。僕を助ければ、将来の諸君の富貴が約束されるのに。このまま魏に行ったところでわずかな褒美がもらえるだけなのだろう。それだっただうかしたら他斗伏様に取り上げられてしまう。後悔するぞ」。

少年は護送兵に言う。

何ともでかい口をきく子どもだと、護送兵は頭を小突いて笑う。それでも、何度も何度も確信に満ちた口調で聞かされると、ひよっとしたらという気にもなる。

少年は言うたびに確信を強める。

——どれほど酷い目に遭わされようとも、こんなことで終わるはずがない。

殺されかけて生き延び、また殺されかけて生き延びる。天に授かったこの身は、何も恐れる必要がない。

馬上より見るのは、生まれてから馴れ親しんだ黄土高原の風光。

——天がここに僕を生み落としたのはここで何かをさせるためだ。

少年は大きく息を吸う。

——春の味がする。

季節はなお冬でも、風には春の気配がある。

——行く手は必ず母が示してくれる。

遠くに小さく黄色い土煙が昇る。護送兵は見知らぬ敵と遭遇するのを恐れ、足を早める。

土煙は徐々に接近し、翌朝になって、追いつかれるのは避けられないと知れる。護送兵は好所を求めて馬を止め、武器を構える。

案ずるまでもなく、来たのは阿利だった。護送兵はほつとすると同時に、阿利がひどく殺気立っているのに驚く。

阿利は激しい勢いで駆け寄り、馬を止めるよりも先に、

「縄を切れ」。

と、叫ぶ。

「他斗伏様のご命令でしようか」。

阿利は剣を輝かせる。一緒に来た二十人ばかりが携える武器はいずれも阿利が作った優品で、護送兵が持つのは断然違う。

「訊くな」。

立ち竦む護送兵の前で、阿利は少年の縄を切る。

——こうなるはずだった。

少年は、そのことを確かめようと、

「どうして助けてくださるのですか」。

「俺に訳を問うのか。おまえが自分で言った通りだ」。

「天のために惜しむのですか」。

「俺自身のためにも惜しむ。俺が言う通りの城を築いていたら、おまえの親

父は死ななくてすんだ。絶対に落ちない城を俺は造ってみせると言った。遊牧の民に城は無用と、おまえの親父は笑った。城を築くのは天から授かった俺の使命だ。それをするためにおまえは生き延びなければならない」。

「城なら、他斗伏様のために造ればよろしいではありませんか」。

阿利は甲高い声で笑う。

「俺が造るのは天下第一の城だ。それにふさわしい者でなければならぬ」。

勃勃少年はうなづく。

阿利はひとふりの剣を渡し、

「これを持って没奕于ほつきぎ殿のところに行け。俺が作った第一の剣だ。

いまのところ第一というだけで、まだ天下一とまではいえない。剣の名は虎

雀剣だ。没奕于殿に見る目があれば、剣を惜しみ、おまえを惜しむだろう。

おまえがひとかどの大将になったときにまた会おう。辛抱しろ。俺も修練を

積む」。

少年は、阿利の前で剣を抜き放つ。天に授かったこの身を託すに足る逸品

であると知る。

「仰せの通りにいたします」。

阿利は護送兵に言う。

「気の毒だが、おまえたちはもう他斗伏様のもとには帰れない。帰ろうとする者は俺がここで斬る。幸運にも逃げおおせた者がいても、この子を逃した罪を魏国に詫びるために、他斗伏様はおまえたちを必ず殺す。まだ生きたいと思うのなら、この子を守って没奕于殿のところに行け」。

護送兵は従うよりない。

勃勃少年は剣を納め、護送兵を見回す。立場が逆になったのを知る。

——この者たちの運命は自分にかかっている。この者たちに望むものを与え、この身を天に授かったとの証としよう。

「どうだ、何であれ、必ず僕が言った通りになる。将来の諸君の富貴がこれで約束された。諸君は後悔しないですむ」。

**没奕于**は鮮卑族で、この時代を生きる一人として野心家である。符堅が南征に失敗したとき、それを待っていたかのように、劉衛辰と同様に自立を目指した。

符堅は、羌族の姚萇（よう ちょう）に殺された。姚萇は秦国を建てたが、その号令は初めは限られた地域にしか及ばず、没奕于は符堅の息子の符登（ふ）とを支持しつつ、己の勢力拡大を図った。

西域では鮮卑族の乞伏国仁（きつぷく こくじん）が勢いを得て、別の鮮卑族との間で大きな戦を交えた。両者の間に入って、没奕于は漁夫の利を得ようと目論んで失敗した。やむなく乞伏国仁に従属し、乞伏国仁が死ぬと後を継いだ弟の乞伏乾帰（きつぷく かんき）に、二人の息子を人質として差し出した。乞伏乾帰とともに鮮卑族の大兜部を攻め、その人馬を山分けした。兵力の増強に成功した没奕于は、二人の息子を取り戻し、劉衛辰と手を結んで乞伏乾帰に反旗を翻した。乞伏乾帰は強く、没奕于は矢を目に受けて敗走した。没奕



于是、よんどころなく、そのころ急速に伸び出した姚萇の傘下に降った。

没奕于の本拠地は長安北西の高平（こうへい）である。

勃勃少年は、黄土高原を出て高平に来て、初めて城壁に囲まれた中国の都市を見た。長安、洛陽、建康などの当時の大都市と比べたら、高平などは田舎のごく小さな町でしかない。それでも、家屋が密集し、人や荷が道をひっきりなしに往来し、市場に多数の商品が並んで五胡の言葉が入り混じるありさまは、少年を驚かせるに十分だ。

没奕于の邸宅は高平の中心地にあった。没奕于はこの地の軍事、政治、経済の一切を一人で決し、邸内に数百人の兵士を養っている。

町の雰囲気にすでに気を吞まれていた護送兵は、厳めしい門構えを遠望して怖気づく。少年は、同調してはならぬと感じ、

——天に授かるこの身に、この町などどれほどのものでもない。

わざと胸を張り、護送兵に言う。

「あの屋敷はいずれ僕のものになる。必ずそうなる。だが、その前に、諸君

にかなりの苦勞を強いる。辛抱してくれ。五年では短すぎようが、十年はかかるまい。諸君はどうかへこたれずにいてほしい」。

護送兵は互いに顔を見合わせる。

——口でいくら言ったところで信じないのだろう。

少年は、自分で言ったことを直ちに確信するのに、他人はそうではないのを知る。自分の正しさを自分が出す結果で示すしかない、門をぐつと睨む。

そこに、血まみれの女が現れ、手招きをする。

——ここで間違いない。

少年は、劉衛辰の子であると名乗り、案内を乞う。おどおどする護送兵を残して一人邸内に入る。

没奕子は少年を睨む。

「死に損ないが何しに来た」。

少年は劍を差し出す。没奕子が劍を抜くと、一つしかない目が妖しく緑色に光る。

「阿利の剣だな。」

「虎雀剣と申します。」

「これをわしに届けるために来たのか。」

「虎雀剣とこの身といずれが優るとご覧でしょうか。」

没奕子は少年を見据える。

「魏国の不俱戴天の敵であった劉衛辰殿の子のために、この地上で生きられる場所を探してやるとして、ここその他にどこがあるのか。匈奴であることが捨てられるのなら、生かしてやってもいい。」

「僕のこの身は天に授けられたものです。たまたま匈奴であっただけで、それはどうでもいいことです。ですから、匈奴であることが捨てられるかどうか、僕にはわかりません。」

「妙に理屈っぽいことを言う子どもだ。」

「実際に見極めていただくのがよろしいでしょう。」

「その通りだろうな。どれだけ耐えられるか見せてもらおうか。」

没奕子は、邸中で最も酷薄な男を呼び、

「これをおまえの好きなようにしろ。匈奴でなくすのだ。匈奴以下、つまり家畜にしてやれ」。

国を失い家を失った匈奴の少年が、鮮卑の家に身を委ねたのだから、いかなる仕打ちにも耐えるより他はない。少年は牛馬に劣る扱いを受けた。護送兵は鮮卑族であったから、まだしも人として最低のところ留まった。

少年は生傷が絶えない。稀に護送兵に出会うと、また新たに生じた傷のひどさを同情されるよりも先に、

「どうか辛抱してくれ。いつか必ず安楽な暮らしをさせるから」。

と、ささやく。

少年は完全服従を貫き、二年余りで、家畜から人になる。最も下の兵士にさせられ、苛め抜かれる。

十五歳になると、もともと大人並みであった体が一層大きくなって、人を圧倒するばかりになる。ある日、二人一組になつての鍛錬中に、相手の腕を

取って振ると、鈍い音とともに相手の肩がはずれた。少年に特別の意図はなかったが、それが居丈高に少年に当たることの多い男であったために、周囲の人々は異なる受け止め方をした。その雰囲気に気付いた少年は、

——ようやく時が来るようだ。

と、感じる。

苦痛に歪む相手の顔をしばらく冷やかに眺め、おもむろに肩を入れてやる。

相手はこそこそと逃げ去る。

没奕子に呼ばれる。

「大した体になったようだな」。

没奕子は少年の肉体を検分する。

史書によれば、勃勃は身の丈が八尺五寸、腰のまわりが十圍あったという。

大きいだけでなく、その肉体は美しくもあつたと記される。

「おまえは、確か、天に授けられたとか言っていたな。なるほど、これだけの体は稀だ。天の賜わり物であつてもおかしくはあるまい。これだけのもの

を活かすには、頭が空っぽではいけない」。

没奕于は少年に学問を習わせる。破格の扱いだ。

少年は呑み込みが速い。手習いの師匠は、少年が没奕于に気に入られていてのを見て、少年が少しでも上達すると、没奕于の前ではめそやす。

——ここでやり損なってはならない。

少年は没奕于の前での振る舞いを考える。

常に謙虚で従順なありさまに、没奕于は少年を見るだけで相好を崩すようになる。

最初に家畜扱いした男が腰をかがめて挨拶するようになる。少年が無返答でいると、男は猫なで声で擦り寄って来る。

——わざわざ怒らせたのか。

近づいて来なければ何事もなかったのだろうが、まとわりつくのを「やめろ」と言うのももどかしく、顔面に拳を一発食らわした。男は倒れた。たま打ち所が悪かったのだろう、そのまま二度と起き上がらなかつた。

時代は乱世である、力のある者が力のない者を負かすのが絶対の真理だ。復讐は賞賛される。少年に接する周囲の態度がさらに変わる。

少年は史書から学ぶ。

——大望を成就させた者には必ず雌伏の時がある。すぐにつけ上がるのは自ら失敗を求めるようなものだ。歴史に赫々たる名を刻むのは天に選ばれた者だ。自分もその一人であるからには、時を違わぬよう堪えなければいけない。

少年は我が身に辛抱を課した。しかし、天賦の才にものをいわせればできないものはないくらいであったから、一つに打ち込んで精妙の域に達するまで己を磨くのを不得手とした。経典を一字ずつ深く理解するのは迂遠に感じられ、我が意に適うところだけを拾って読む。理に従い礼に合致した振る舞いを、上に立つ者の前では上手にやってみせても、真に徳を積み身を慎むのではない。剣を持てば力任せで、矢は狙いを定めるのももどかしく発する。

没奕于 はかねてから皇帝になりたいと願い、五十を超えて、人の下風に立っていないければならないのを屈辱と感じている。猜疑心が強く、裏切りが横

行する乱世に生きて、疑い深さは年々ひどくなる。勃勃を家畜として苛め抜いたのも猜疑心からであつた。没奕子にはろくな息子がいない。息子が役立ったのは人質として使つたときだけだ。役立たずめと父が息子を見放せば、息子は当然のこと父を憎む。

少年は、このようなことが我が身に幸いをもたらすと考え、没奕子にますます恭順に仕える。

「どうだ。わしの息子にならぬか。どうやら、末の娘がおまえに惚れているよ。うなのだ」。

「まさか、私にはそのような幸せを頂戴するのは許されなと思います」。

「匈奴であることを言うのか。しかし、娘が惚れてしまったのでは、このわしとてどうすることもできまい」。

没奕子の末の娘は何かと評判が悪くて婿のなり手がなく、一人家に残つていた。少年より十歳ほど上だ。

没奕子の婿になると、妻に対してこの上なく礼儀正しくふるまい、



「自分ほどの幸せ者はこの世にはいない」。

と、誰彼かまわず吹聴する。一介の孤児が有力者の婿になったのだから、人々は少年が言うのをまさにその通りだと受け止める。

妻は父の疑い深さをよりひどく受け継いでいる。若い婿に、少しでもあやしく思えるところがあると、激しく罵って、時に鞭で打つ。少年は一切抗弁しない。打たれて傷が付くのは馴れている。妻は、一時の激昂がおさまると、往往にして泣きわめいて、狂ったように少年を愛撫する。

そのようなことは、口外することなく、没奕于の前では、妻の美点ばかりを言う。妻はそれを喜び、父の前で夫を褒め称える。

没奕于は大いに満足し、少年に向かつて、望む物を与えようと言う。常に、妻に贈るものを言う。たった一度だけ、もとの護送兵の処遇をよくしてくれよう頼んだ。そのようなことがますます没奕于の覚えをよくする。

**初陣**は因縁の戦いとなる。

没奕于は言う。

「おまえの力を試すときが来た。相手は、おまえを魏国に売ろうとした他斗伏だ。思う存分戦うがいい」。

叱干部の他斗伏は、勃勃を逃してしまった罪を魏国から問われた。魏は、言いがかりがありさえすればよかった。魏の攻撃を受け切れず、他斗伏は姚萇の秦国に逃げ込んだ。しばらく長安で姚萇の保護下に置かれていたが、自由を求めて長安を脱出し、魏と秦のはざままで自立を目指した。しかし、それは容易ではなく、隆安二（三九八）年に魏の王が皇帝を称するようになったのを機に、魏の支配を甘んじて受け入れるよりなかった。

黄土高原がそっくり魏のものになっては秦にとって大変な脅威であると、姚萇は他斗伏を征伐するよう没奕于に命じた。

「お父上の名を汚さぬ戦いぶりを必ずお見せいたしましょう」。

勃勃に八百騎が授けられ、監視役が一人付く。勃勃が勝手な振る舞いをし

ないよう、没奕子に代わって見張るのである。

——つまらないことをする。いくら何でもいまは早すぎる。監視されなければならぬようなことをするはずがない。

勃勃が思うのは、勝たなければならぬということだ。

——もしも負けたら、何も始まらずに終わってしまう。

勃勃は勝つために、かつての護送兵を全員貫い受ける。

「よくぞ辛抱してくれた。諸君に恩返しする機会がようやく来た。諸君を一人残らず部隊長にする」。

護送兵は喜ぶが、相手が他斗伏であることには複雑な思いがある。

「諸君の中には、兄弟や親類が他斗伏のもとにいる者も多い。俺には他斗伏に恨みがあつても、諸君にはない。他斗伏と戦いたくないと思うのなら、俺は無理強いをしない。ここから去つてよい。他斗伏のもとに行つてもいいだろう。諸君の好きに任せる。父上には俺から何とでも言い訳をする。それは心配しなくていい。しかし、向こうに行けば、諸君はもはや敵だ。一切の

容赦はしない」。

護送兵は顔を見合わせ、一人が、

「いまさらあちらには帰れません」

と言うと、皆が口を揃える。

「俺と一緒に戦うのだな。ならば、俺に命を預けてほしい。俺の命令に必ず従ってもらいたい。諸君は部隊長だ。諸君が俺に従ってくれなければ、誰も俺の言うことを聞いてくれない。勝敗はその一事にかかっている」。

護送兵は、勃勃の命令を必ず守ると誓う。

——俺はこの身を天に授かった。言ったことは必ず守る。他の者にも、俺が言った通りにしてもらわなければならない。

勃勃は高平を発ち、懐かしい黄土高原を目にする。

——俺はここで何かをするために生まれた。ようやく最初の一步を踏み出す。

失敗はあり得ない。

他斗伏を求めること二十日余り、ようやく敵の位置を知る。他斗伏はわず

か八百騎の勃勃など物の数ともせず、その後が続いて来るであろう秦国の主軍との戦いに備えて、諸族の軍勢を結集しつつあった。

勃勃は作戦を授ける。八百騎を二手に分け、第一隊を自身が率い、第二隊を護送兵の中で年長の鹿七（ろくよ）に指揮させ、おとりとして使う。第一隊は夜の間に進んで谷に潜む。第二隊は、わざと敵の存在に気付かぬふりをして敵の前を通過する。

監視役が難色を示す。

「もとより少ない我々を二つに分けたのでは、より簡単に潰されてしまう」。敵が数倍ないし十倍の勢力であるのに、早くも怖気づいたのだ。

勃勃は、監視役の見解に全面的に従うと皆の前で言い、こっそり部隊長を集め、

「諸君は、俺の言った通りに動いてほしい」。

勃勃に戦の経験はない。あるのは、天に授かった身であるとの自信だけだ。そこに賭けてこそ勝利がある。

——いくら老練でも、いくら数で優ろうとも、俺が勝つ。

「俺を阻む者は誰一人許さない。狙いは他斗伏一人。必ず仕留めろ。俺の命令に必ず従うのだ」。

勃勃は、監視役をしたたかに酔わせ、第二隊に残して、自身は先行する。

狙い通り、他斗伏は、わずかな敵をひと思いに潰してしまおうと、第二隊を攻撃する。鹿弋は隊列を乱して逃走する。他斗伏は追い、鹿弋は逃げ足速く、散り散りになって高所に姿をくらます。他斗伏は四方に兵を出して追跡する。

勃勃は、他斗伏の本隊に向かって疾駆する。伏兵の出現に、他斗伏は四散した兵を集める。鹿弋は、引き返す敵を追って猛然と斜面を下る。他斗伏は前後を挟まれ、退路を切り開いて逃げようとする。勃勃は、ここぞとばかりに総攻撃をかける。

「どうしてこんなことになったのだ」。

監視役が勃勃の脇に駆け寄る。

「必ず勝利します」。

「何を言う。回りに、敵ではないか」。

その言葉の通りだった。勃勃の八百騎のほとんどが他斗伏を追い、勃勃の周りは手薄になって、四方から敵が迫って来ている。

——しまった。

予期せぬことであつたが、監視役の前で、慌てる訳にはいかない。

——俺が負けるはずがない。

矛を振るつて敵を迎え撃つ。真つ先に来た相手の脳天をかち割つて、敵をひるませようと渾身の力で打つ。力が入りすぎて狙いがはずれ、相手の鎧の肩に当たる。矛の先端がぼきりと折れる。

いつもの不得手が露呈した。

敵の槍が監視役の前で交差する。勃勃は折れた矛を振り回して敵を追い払つて、監視役を逃す。矛はすっかりぼろぼろだ。投げ棄てる。

敵は幾本もの槍を並べて来る。味方が横ざまに当たり、かろうじて身をか

わす。敵と味方が乱れ、勃勃は傷を受ける。部下に手綱を曳かれて逃れる。鹿弋は他斗伏を追う。他斗伏は凹所にはまる。鹿弋は遠巻きにして矢の雨を降らせる。

敵が叫ぶ。

「おまえは鹿弋だろう。わかっているぞ。おまえの矢でおまえの弟が死に、おまえの父が傷ついた。いつまで射続けるのだ」。

声は鹿弋の兄だ。

他斗伏が叫ぶ。

「鹿弋よ、頼む、ここは見逃してくれ。恩は決して忘れない。我々は魏国にやむをえず従っているだけなのだ。勃勃殿が武に優れることがわかった。ここで見逃してくれば、わしは仲間を説得し、揃って秦国に従うようにする。勃勃殿にとって、大いに益になるだろう」。

鹿弋は返事をしないが、矢を射るのを止める。他斗伏は走り去る。勃勃は敵をどうにか振り切って鹿弋と合流する。



「卑怯千万の敵は、逃げ足が速く、ここで見失ってしまいました」。

鹿弋の報告に勃勃はむっとする。

「なぜ追わない。俺が来るのをのんびんだらりと待っていたのか。狙いは他斗伏一人、必ず仕留めろと命じたのを忘れたのか」。

「夕暮れが迫り、敵地にこれ以上踏み込むのは危険と思いました」。

勃勃は怒る。

——俺は失敗できない。他斗伏を討たなければ終わりだ。

勃勃の耳にある者が実情を告げる。

「おまえが勝手な判断したのか。俺の命令は絶対だと言ったではないか」。

勃勃は鹿弋に縄を打たせる。護送兵の一人が言う。

「鹿弋がしたのは許せません。しかし、鹿弋がいなければ、負けていたのかもわからないのです」。

勃勃は激怒する。

——俺が誤ったとでも言うのか。

直ちに鹿弋を斬り、

「他斗伏を追え。必ず仕留めろ。それができなければ、全ての者が鹿弋のようになる」。

勃勃は夜になるのも構わずに進む。

翌日の昼に、他斗伏に追いつく。諸族の軍勢が加わって、敵は数倍に膨れ上がっている。

勃勃は率いる兵士を見る。数で劣り、しかも無理な行軍で疲れてもいる。「ここは退却する以外にない」。

監視役が言う。

——勝てると思ったらいましかない。

勃勃は馬に鞭を当てる。

「必ず他斗伏を討て」。

八百騎は、他斗伏だけに狙いを定めて我武者羅に攻め入る。

新たに加わった軍勢は、あえて当るのを避けて、脇に回ろうとする。その

動きが他斗伏軍を混乱させる。敵は統率を失う。他斗伏は逃げるしかない。敵は崩壊する。

見える範囲から敵は消え、勃勃は味方を休ませる。

——この連中で次はもう戦えない。

戦いを通して、自身と自分の軍団の未熟さを痛感していた。

——ここまでだ。しかし俺は勝つ。

「追うまでもない。諸君に休息を与える。他斗伏の首は三日もすればここに届くであろう」。

勃勃は、強がりでなく言う。

——どのようなかたちであれ俺は勝つ。だとすれば、この一つのこと以外にはない。

諸族を寄せ集めて作った軍団に裏切りは付き物だ。劉衛辰もそれで死んだ。

監視役は冷笑する。

待つこと二日で他斗伏の首が届く。持って来たのは阿利だ。

阿利を見て涙が落ちそうになる。阿利が前に進み出ると、勃勃はいきなり怒鳴りつける。

「その首一つで赦されると思っっているのか。叱干部の者どもを皆殺しにせねばこれは癒えぬのだ」。

勃勃は蒙った傷を示す。

阿利は平伏し、

「私は申すに及ばず、叱干部の者は残らず大王様に命を差し出します」。

「命を取ってもつもらぬ」。

「大王様のお望み通りに何でもさせていただきます」。

「口でそのように言うだけなら簡単だ」。

「何なりとご命じください。必ず成し遂げます」。

「そうか。では、ここにいる八百の兵をおまえが指揮して八万の敵を破つてみせよ」。

「敵はどこにおります」。

「敵というものはいつどこから来るのかわからぬ。いますぐかもしれない。よろしゅうございます。大王様のお望みのようにいたします」。

「俺がこの傷を受けたのは矛が折れたからだ。おまえがその首を持って来なければならなかったのは、俺の部下が命令に従わなかったからだ。強くするためならどのようにしてくれてもいい」。

監視役が口をはさむ。

「八百騎は没変干様がお授けになったものだ。勝手は許されない」。

「父上は必ず喜んでくださる。あなたさまもたくさん褒美を頂戴できましたよう」。

勃勃は部隊長を集める。

「戦いはひとまず終わった。もしも諸君が望むのなら、ここで俺のもとから去ってよい。諸君はよく辛抱してくれた。長平に帰って、褒美をもらえたなら、それをすべて諸君に贈る。もしも諸君が望むのならば、ここに留まってくれていい。阿利がこれから作る敵なしの部隊の一員になる。より多くのも

のが手に入れられるようになるだろう。どちらでも好きに選んでよい。俺のもとに残る限りは俺の命令に必ず従ってもらおう」。

全員が勃勃のもとに残ると答える。

「よろしい。では、俺は一つだけ命じる。阿利の命令を俺の命令だ思うのだ」。

阿利は部隊長に軍律を授ける。阿利は、八百人の兵の一人でも勝手をするのを許さない。違背者を出した部隊長を執拗に責める。阿利の号令のもと、一糸乱れずに全ての兵が動くようになるまで徹底的に訓練する。

阿利は武器を一新する。阿利は、勃勃の一件で他斗伏に逆らってから、黄土高原の一隅に潜み、武器を作る専門集団を作り上げた。阿利の武器は極めて優秀で、諸勢力に高く売れた。

勃勃は二人だけになると阿利に言う。

「いまの俺があるのはそなたのお蔭だ。感謝している。だが、いまの俺はあの当時の子どもではない。そなたの夢を実現するには、この身は天に授かったものであるのを、誰の目にも明らかかなものにしていかなければならない」。

「よく承知しております。天下にお一人のお方に尽くすために私は生まれたのです」。

阿利が勃勃に従ったのが知れると、黄土高原の諸族はもはや手出しせず、勃勃の軍団が南に引き揚げるのを静観した。

没奕子は目を細めて勃勃を迎える。

「我が子よ、よくぞやった。褒美は何がほしいか、遠慮なく言うがいい」。

勃勃は、監視役の支えがなければ勝てなかったとして、監視役のためのものを望む。

「あれは知恵者だ。おまえに言われなくとも、わしが褒美をやる」。

勃勃は、八百騎をこのまま自分の部下にしてほしいと望む。

「もとよりそのつもりだ。褒美でも何でもない」。

帰りを心配して待っていた妻に与えるものを望む。

「おまえ自身のもを何なりと言ってみる」。

もとの護送兵の一人一人に与える住まいを望む。

「それも人に与えるものではないか。おまえのためのものは何かないのか。」  
「この上は何もありません。」

「何でもいいから、何か欲しいと言ってくれないと、わしの心がすまない。」  
「本当に何でもよろしいのでしょうか。」

「まさかわしの命をほしいとは言うまいな。」

笑う没奕子に、戦いで矛が折れたことを明かし、

「父上のためにより一層大きな働きをするには、優れた武器がなくては適い  
ません。虎雀剣を望んで許されるのなら、それに勝るものはないと思うので  
す。」

没奕子の表情が変わる。

「虎雀剣であるか。あれはおまえが持って来たものだ。返してやりたい気も  
ある。しかし、まだ早かるう。もうしばらくわしが持っていたい。」

勃勃は急いでその望みを取り下げる。

——いまでなくてもよい。いずれは俺のものになるのだから。



このころまでに、北中国では秦国と魏国が他に抜きん出た存在となっていた。秦国は、姚萇からその息子の姚興（ようこう）に代替わりし、子は父に優って、国は最隆盛期を迎えつつあった。

姚興は、他斗伏を討った若武者を、西にのさばる乞伏乾帰の征伐に使ってみようとする。乞伏乾帰はかつて没奕于の片目を射抜いた因縁の敵だ。

勃勃は初めて長安に足を踏み入れる。長安は古の漢の都としての風格が具わるとともに、秦国の都として新たな趣が付け加えられつつあった。雲を突く大伽藍が幾つも並ぶのは過去にない新風景である。どれもが真新しく、建設中のものもある。仏教が西方から本格的に入って来たのは五胡十六国の時代で、とりわけ姚興は仏教に深く帰依した。

勃勃はにわかには仏教の知識を仕入れ、姚興の前ではその教えを重んじるそぶりを見せなければならぬまいと考えはしても、巨大な建築を目の当たりにす

ると、

——こんなものが何のためになる。役にも立たぬものを造り、そこに僧徒を養つて無駄飯を食わして何のためになるのだ。ものの軽重がわからぬ姚興がどうして皇帝でいられるのか。

無性に腹が立ち、

——姚興などはすぐに滅ぶ。この長安はいずれ俺のものだ。

と、思つてみても、長安はそれほど欲しいとは感じない。

——長安を手にしたところで、こんな寺をわざわざなくさなければならぬのだから、ただ面倒なだけだ。

姚興の住まう豪壮な宮殿を見ても、同じように無駄としか思えない。

姚興は一目で勃勃を気に入る。勃勃の外貌は美しく、没奕于でさえ完全に信じさせた恭順な振る舞いは、より大らかな姚興の目には、この上なく心地よいものに映る。姚興は民族の違いに拘泥せず、有用な人物と見れば即座に重要な地位に就ける。それが秦国を大きく発展させた一つの要因でもある。

姚興は、勃勃に二千騎を与えて、乞伏乾歸征伐を命じる。

阿利は言う。

「普通に戦って勝ったところで、所詮、秦国の利になるだけです。誰にもできない戦い方をして、大王様のお名を天下に鳴り響かせましょう。」

姚興より授かった二千騎ともとの八百騎を率いて国の境を出ると、いきなり全軍を疾走させ、道なき道を突進し、一気に敵領深くに入り込む。無茶な行軍に多数が落伍する。阿利は容赦なく見捨てる。

「弱兵は何十人いても役に立ちません。真に強い兵のみ残ればいいのです。駄剣は折って捨てます。真に鍛え抜かれた剣のみが敵を倒します」。

突然の襲撃に敵は為す術を知らない。次々に町を奪い、殺戮、略奪、躡辱、何でも兵の好き放題だ。それが強い者への当然の報酬だ。

勃勃の働きを見て、姚興が長安を出て、正面から総攻撃をかける。

この隙に、没奕干は長安を襲撃しようと考える。あわよくば勃勃と挟み撃ちにして姚興を滅ぼしてしまえるかもしれない。側近の皇甫序（こうほ じよ）

が止める。

「今はまだその時ではありません」。

「だったらいつだというのだ。時が来る前に寿命が尽きては何もならない」。  
「我等の戦力は微々たるものです。勃勃様が動かせるのは千をもって数えるだけです。いずれは万をもって数える大軍団を自由にできましよう。早まってはなりません」。

没奕子は思案の末に皇甫序に同意する。猜疑心の強さから、後に小さな罪状にかこつけて皇甫序を殺す。

乞伏乾帰は敗れ、あちこち逃げ惑った末に、秦国に投降する。

姚興は、勃勃を軍政の中核を担う要職に就けようとする。皇帝の弟の姚邕（よう ゆう）が止める。

「私の見ますところ、勃勃は天性不仁であります。お近づけになつてはならぬ男です」。

姚興の自分の目が正しさを疑わない。

「勃勃は勇才の者だ。天下を平らげるにはこの男が要る。朕はそれを使う術を心得ている。朕が大業を遂げるのをおまえは妨げたいのか。それとも、勃勃の代わりがおまえにできるのか」。

弟は黙る。

姚興は魏国攻略を考えるが、敵が先に動く。

隆安五（四〇二）年、没奕于是我が耳と目を疑う。五万の魏軍が高平の間近に迫っている。誰の目にも触れずはどこから来たのか。天から降って来たのか。没奕于是長安に急使を出す。

勃勃は五千の兵を率いて走る。

高平を臨む峠に至ると、野を覆う洪水のように民衆が逃げて来る。

阿利が言う。

「この流れは止められますまい」。

「ここに留まって魏軍を待ち受けるのか」。

「それはお勧めできません」。

勃勃は笑う。

「俺にもその気はない。高平が落ちたのならそれでいい。魏が長安に攻め入りたいのならそれもいいだろう。無理にここで立ちほだかることはない」。

「この五千を何に使いましようか」。

「こればかりで魏に先んじるわけにもいくまいな」。

しばし思案していると、没奕于自身が逃げて来たとの報せに、

「何だ、あの親爺は助かったのか」。

阿利に向かって笑いかける。

「時はいましばらくということなのでございましょう」。

「俺はまだまだ孝行息子だ」。

勃勃は表情を改め、没奕于の前に駆け寄り、涙ながらに迎える。

「ご無事でございましたか。お怪我もないご様子にひとまず安堵いたしました。それにしても父上の大切な高平を。憎むべきは魏の連中にございます。ただちにここより下り、高平を取り戻してご覧に入れます」。

「おまえは幾人を率いて来た」。

「五千です」。

「敵は五万だ。十倍の敵を相手に城攻めをする兵法はあるまい」。

「父上のためとあらば、何とでもしてみせます」。

「数だけでない。いまは時の運も向こうにあるようだ。無駄な戦いをおまえにさせたくない」。

「では、いかにしましょうか」。

「ここでおまえに会えたのは、わしの夢にもまだ一縷の望みがあるということであろう。魏軍と戦うのに五千は少なすぎるが、何かのときには役に立つ」。

何かのときにはな」。

没奕于は思案し、

「秦州ではどうだ」。

勃勃は手を打ち、

「さすがお父上でございます。おっしゃる通りにいたしましょう」。

秦州は山を越えた南の町で、長安と西域を結ぶ重要な交通路上にある。魏軍が長安を攻めて姚興がもしも敗れた場合に、秦州は自立を凶るのに悪くない場所だ。

さすがに姚興は一方的に攻められるではなかった。東方攻略のために集めつつあった軍勢を魏国領内に侵入させた。戦局の変化に、魏軍は高平から退却した。その際に、馬四万余頭、雑畜九万余匹が連れ去られた。

没奕于は勃勃を連れて廢墟と化した高平に戻る。

「この町を育てるのに何年を要したことか」。

「このわたくしがおります。必ず父上のお望みを叶えてさしあげます」。

「頼みはおまえだけだ」。

勃勃は長安に戻ると、閱兵式の挙行を命じられる。魏に対して軍備を誇示するのだ。阿利は一人分の武器を新調し、長安城の西で、華麗な閱兵式を演出する。姚興は大いに満足する。

勃勃は、特に見栄えのいい兵を連れて宮中に参内する。姚興はそれを従え



て東堂に赴く。勢揃いした群臣の周りを兵が取り囲む。

姚興は言う。

「我が秦の軍団は見ての通りかつてない強兵揃いとなった。朕はこの者たちを連れて魏国征伐に出る。長平を奇襲されたお返しをたっぷりしてやらねばならない」。

勃勃の号令のもと兵士が雄叫びを上げる。

一人の大臣が皇帝を諫める。姚興は考えを変えない。大臣は勇気を奮つてもう一度反対する。姚興は激怒する。大臣は覚悟を決め、自分の命を差し出すのと引き替えに、皇帝自身が戦場に赴くことだけは思いとどまってほしいと言う。姚興は渋々同意する。

十万の大軍が東方に送られる。勃勃は没奕于とともに、魏軍が再び同じ経路で侵入して来るのを防ぐべく北方の備えをする。

秦軍は華々しく出陣し、敵領を侵したものの、はかばかしい戦果をあげられずに戦局は膠着する。姚興は焦れ、大臣との約束を破って自ら四万七千を

率いて長安を発つ。姚興は黄河を渡り、魏の乾城を攻め取る。皇帝としての一応の面目を施したのだが、その後は魏軍の頑強な抵抗に遭って進めなくなる。長期戦になつては秦軍に不利で、食糧も矢種も尽きて退却を余儀なくされる。引き揚げる途中で四万余が敵の擒となり、遠征は失敗に終わる。

姚興はこの痛手に、以前に増して仏教にのめり込む。宮中に大臣のいない日があつても、皇帝のそばには必ず仏僧がいる。中宮に波若台が建てられ、千余人の僧が毎日参禅し、皇帝もその中に混じる。長安の仏寺は数を増し続け、皇帝は寺々を順に巡って幾日間も籠る。公卿以下、競つて皇帝の嗜好に倣い、秦国の主要な都市の十に九まで仏寺が建つようになる。

皇帝の弟の姚邕は仏教を信奉せず、国家の財を注ぎ込む非を皇帝に訴える。姚興は耳を貸さない。

姚興は、その間にも、どうかして魏に借り返したいものと思案し、北から圧力をかけようとする。魏軍が突如として長平に現れた逆手を取つて、こちらから仕掛けようというのだ。それにはうつつけの人物がいる。勃勃だ。

姚邕が反対する。

「虎に翼を与えるようなものです」

姚興は、弟の苦言にまたかと嫌な顔をする。

「五胡が入り交る朔方は非常に難しい場所だ。魏の力が根深いところにまで浸透している。この前のようなことがあつては安心できない。我等が朔方を抑え、逆に向こうに攻め入るべきだ。勃勃ほどふさわしい者はいない。勃勃にとって魏は父の仇だ」。

「勃勃は天性不仁の者です。これ以上、使うべきではありません」。

「おまえは勃勃のこととなると決まつてそう言う。余程、勃勃が嫌いなようだ。言つておくが、国家経営は好悪の情でなすものではない。適材適所で人を用いるのだ」。

「勃勃は危険な人物です。忠を尽くしていると見せながら、その実、心の内ではお上を侮っています。戦では確かに勝利を得ています。しかし、下の者を残酷に扱い、法を無視した貪暴な振る舞いは目に余るものがあります。己

の利に聡く、その去就はまことに軽いと言うべきです。度を過ぎたお上の寵愛に付け上がって、どのような害をなすかわかったものではありません」。

弟の激しい言葉に、姚邕もいくらか疑いの念を抱き、

「そこまで言うのなら、いま少し考えてみようか」。

一度は保留にするが、勃勃を呼んで朔方情勢について問うと、この者にこそ大役を任せたい気になる。

姚邕が勃勃を嫌っているのは朝廷では知らぬ者はいない。勃勃は、姚邕に対して常にへりくだり、皇帝の前でも姚邕を決して悪く言わない。皇帝は勃勃をより信頼し、朔方経営を委ねる。

勃勃は長安を発つ。阿利やかつての護送兵、それに最初に授かった八百騎など身近な者全てを連れる。妻子も一緒に、それは没奕于に会わせるためと名目で皇帝の許しを得た。妻子をいわば人質のようにされるのを勃勃が嫌ったのではない。別の意図からだ。

——今度ここから入るのは、長安が俺のものになったときだ。

勃勃は都の城門を振り返って、そのように思う。

高平に立ち寄り、

「いよいよ父上のお望みが叶う時が参ります」。

「老いた身に、これが最後の機会だろう」。

「朔方がわたくしの号令のもとに動くようになれば、長安は我らの手に内にあるのと同じです」。

「仏教三昧のあの男が皇帝でいられるのは残りわずかだ。毎日座禪をしても、我が身に迫る命運すら知れないとは、実に愚かな奴だ」。

没奕子は笑う。

妻子を没奕子に託して、長男だけを連れる。妻とのしみじみとした別れを没奕子の前で演じる。

高平の町を出て、峠で振り返る。

——あの連中の顔を見ることはもうあるまい。

黄土高原より吹き来る風に、高平に来て以来の辛抱はこれで終わりだと感

じる。

長男に言う。

「おまえにわしの故郷を見せてやる。道々これから練習すれば、馬にも馴れるだろう」。

長男は勃勃が高平に来たときとほぼ同じ年齢だ。

「早く父上のようになりたいと思います」。

長男は素直な笑顔を向ける。

「よく励めよ」。

勃勃は子どもにも愛情を感じたことはない。

——所詮こいつは没奕子の娘が生んだ子だ。決して俺のようにはならない。

阿利に言う。

「今日から俺は誰にも頭を下げない。天から授かったこの身が仰ぐのは天だけだ。あの高原を自由に俺は駆ける」。

義熙二(四〇七)年春。

柔然(じゅうぜん)国の長、杜窳(とろん)が秦国皇帝に献上する馬八千頭が、朔方の地を通って長安に向かつて進みつつあった。

勃勃は大城に接待所を設け、その一行を慰勞する。酒食をふんだんに用意し、皆は飽くまで食い飽くまで飲み、順に酔いつぶれる。接待所の四周を武装兵が嚴重に固め、一行が寢静まったのを見計らって火を放つ。火に気付いて逃げ出た者も斬られ、一人も生き残らない。

勃勃は、朔方の地に散在する二万余の部落の全てを従い終えていた。足りないのは優れた馬だった。

勃勃は、八千頭の馬に鍛え抜いた兵士を乗せ、獵を催すとの触れ込みで南へと動く。総勢三万。

没奕于に使者を送る。没奕于是、仏教三昧の無道な皇帝を討つべしとの檄を飛ばし、高平に兵を集める。

黄土高原の空を砂塵で暗くする勃勃の行動に、何事であるかと問う皇帝からの使者が来る。

「魏が黄河を渡る準備をしているとの噂がございます。朝廷の命に従うようになった諸部の者どもを束ねて獵を催し、もって我が朝の武威の盛んなることを示し、戦わずして敵の意を挫く所存であります」。

勃勃は使者の前で獵を催す。兵は優れて統率の取れた動きを見せる。

勃勃は黄土高原の南縁に到達する。

「そなたならここでどうするか」。

阿利に尋ねる。

「南の長安を選ぶか、あるいは西かということございませうか」。

「ほう、西を選ぶこともあるのか。仏教狂いの皇帝を成敗するために我等はここまで来たのではないのか」。

「虎雀劍が要るのでございませう」。

勃勃は笑う。



「俺の心を知るのはそなた一人だ。そなたが作ったあの剣は俺のものでなければならぬ。八千頭の馬の次には、天下一の剣が要る」。

天下一の語に阿利はやや複雑な表情を見せる。虎雀剣を超える剣はいまだに作れていない。

勃勃は天を仰ぎ見る。

「俺が聴くのは天命だけだ」。

剣を抜き、全軍に命じる。

「反逆者を討て」。

高平に集まりつつあった諸軍は、勃勃が攻めて来たと聞いて、一斉に勃勃側に靡き、高平城はたちまち陥落する。

没奕于は息子に命乞いをする。

「俺が欲しいのは虎雀剣だ」。

剣が勃勃の手に戻ると、没奕于の屋敷に火を放ち、出て来た者を一人残らず斬る。

燃え上がる炎の中に、一瞬だけ、血まみれの女の姿を見る。

——天の意に適う俺になった。

没奕于もその娘もその子も死んだ。

長男は朔方に残しておいた。この炎を直視できぬと思うからだ。長男にこのことは知らせない。

阿利に言う。

「もう一人はどうするか」。

「急ぐまでもありますまい」。

姚興からの使者が来る。反逆者を成敗した褒賞を長安に来て受けるように言う。勃勃は無視して高原に引き上げる。

**六月**、高原上のとある一角に全軍を集める。そこは、十歳の勃勃少年が馬に括られて春の匂いを感じた場所だ。

壇を築き、勃勃は高きにする。天を仰いで確信を新たにする。

——この身は天より授かった。そうでなければ、あの日からこうなるはずがない。

厳かに宣言する。

「余は今日ここで、天王（てんおう）にして大单于（だいぜんう）になる。大单于は五胡の長だ。天王は天の命を受けた王だ。余はいずれ、禹（う）の後を継いで真の皇帝になる。他の皇帝を称する者どもはすべて偽者だ。討伐せねばならない」。

壇の下に居並ぶ兵は、勃勃の言葉をただ呆然と聞く。

そうなるであろうことは予想していた。強い夏の日差しに乾いた砂塵の舞う台地は、このような宣言をするのにふさわしくない。王や皇帝となる者は、長安のような大きな都の中心に豪壮な宮殿を構える。

勃勃は静かに笑う。

「見れば、余が言うのを諸君は信じていないようだ。それもやむをえまい。

余には身に付ける宝玉は一つもなく、座るべき玉座もない。まして贅を凝らした宮殿などどこにもない。余が着るのは諸君と何ら変わらない戎衣で、余は諸君とともに露天に眠る。このような余を見て、余の言葉を疑うのは無理もない。しかし、余が皇帝になるのは天の定めである。なぜなら、余はまぎれもなく禹の子だからだ」。

禹とは遙か二千年の昔の皇帝で、勃勃が言うのを兵士は理解できない。あの日から勃勃と長くともにいるもとの護送兵にしてもそうだ。勃勃が並みの人間でないことは、十歳にして吐いた大言を現実のものにして来たことで重々承知はしていても、勃勃のいまの宣言にはさすがにとまどう。

勃勃は、自分の口から出す言葉を真実であると信じる。

——余は血まみれの女から生まれた。母は殺され、余も殺されかけた。余は劉衛辰の子ではない。真の父は誰なのか。天であり、禹である。

勃勃は見直し、この兵も必ず確信に至ると考える。

「余の父である禹は、天下の水土を治めるために大地を歩くこと十三年に及

んだ。たまたま口の家の前を通りかかることがあっても、中に入らなかつた。天より授かった仕事をなすのに休息の時などない。その禹を見出して、皇帝の位を譲った舜（しゅん）や、その前に皇帝であつた堯（ぎょう）は、いったいどのような宮殿に住んでいたのか。土を固めた三段の階段があるだけの高さ三尺の住まいで、屋根の茅は縁を切り揃えることもなかつた。夏には葛の衣をまとい、冬には鹿の皮をまとつた。現在の偽の皇帝どもは何をしているのか。人民の血を絞つて造つた宮殿の奥深くに柔らかな着物にくるまって安逸を貪っているではないか。何千という僧が贅沢三昧の暮らしをして、何万という民が飢えている。余はそのような偽の皇帝を滅ぼし、禹のころの簡素にしてよく治まつた世の中を取り戻す。そうするために天は余をこの地に使わしたので。余は宝玉も宮殿も欲しいとは思わぬ。偽の皇帝どもを滅ぼす鋭利な武器と、何者も恐れぬ勇敢な諸君がいさえすればいい。諸君とともに、歴史に輝く正義の戦の旅に上ろうと思う。」

阿利が間髪入れずに叫ぶ。

「万歳」。

かつての護送兵が呼応する。他の男どもも続き、その声が大地をどよもす。空に血まみれの女が立つ。

——余の真の歩みがこれより始まる。

勃勃は国号を大夏とし、竜昇と改元する。国としての形を整えるために、宰相以下の百官を任命する。

勃勃が朔方に来て以来、兄や弟や親族と称する者が次々と名乗りを上げた。魏によって誰が殺され、誰が生き延びたのか、勃勃は知ろうとしなかった。兄弟に誰がいたかの記憶もない。天に授かった身に親類縁者はなくていい。

阿利が言う。

「いまは国を大きくするのが肝要です。親族を大切にすると喧伝して毒にはなりますまい」。

兄だという一人を丞相に、一人を大將軍に据える。いずれも飾りだ。大夏国に必要なのは、阿利が整えた軍団だけだ。

勃勃は天王になって最初の戦で、鮮卑族の三つの部族を破り、一万数千の敵を捕虜にする。

続いて南に走り、長安の北を守る秦の三つの城を陥落させる。

この勢いのまま長安を取ってしまおうと勇ましく言う將軍がいる。

「大王様が皇帝になられて天下を経営するには、長安を取るべきです。長安を根本の地と定めれば、人心の拠り所が得られ、大業も成るといふものです」。

勃勃は笑う。

——この者どもには、やはり、台地に築いた壇では、いかにも頼りないのだろう。

「いまはその時ではない」。

勃勃は、すぐに北に兵を引くと命じる。

奪ったばかりのこの城に守備兵を残そうと將軍は進言する。

「不要だ」。

勃勃は一言ですませようとするが、將軍たちは不審顔である。阿利が「言

つてやりなさい」と目くばせをする。勃勃は嘆息し、

「諸君は、この城が秦に取り返されるのを恐れるのか。奴等が取り返したければ勝手にすればいい。余がここに来て来たのは、秦の命令には決して従わぬと、姚興に知らせるためだ。余は自由に大地を駆ける。秦が欲しがるのならこの城は預けよう。余が必要になつたら、余はまたここに来る。結局、いつでもこの城は余の意のままだ。人をここに残すのは無駄だ」。

「ならばせめて高平を根本の地とすべきではありませんか。あそこは險固で、山川沃饒で、都にもなる場所です」。

「諸君は都がほしいのか」。

「国であるからには必要でありましょう」。

勃勃は阿利に顔を向け、もう一度嘆息する。

——どこまで口で言つてやらねばならぬのか。

阿利は小さくうなづく。

「諸君は一を知つて二を知らぬ。余の大業はいま始まったばかりだ。諸君の



数はなお多くない。姚興は衰えたとはいえ、なお英雄の名に恥じぬ者だ。もしも余が高平なりどこなり一つの場所を根本の地と定めれば、姚興は全力を挙げて、そこを攻めるだろう。勝敗には時の運が付きものだ。根本の地を定めた上で万一にも失えば、始まったばかりの大業は頓挫する。余はどこも場所を定めず、雲騎をもって風馳し、敵の不意に出て、前を防げば後ろを突き、後ろを防げば前を突く。敵は余に攻められるばかりで、余のどこを攻めたらいいのかわからない。諸君はただ気ままに游食自若とするうちに、十年もたたずして敵は疲れ、嶺北、河東の地はことごとく余のものになる。姚興はもう老境に達し、死ぬのは遠くない。皇子の姚泓（ようこう）は凡弱な小児だ。擒にするのに何の計略もいらぬ。いまあわてて欲しがらなくても長安は余の手に必ず入る。根本の地をいま求めるのは無益だ」。

勃勃は高原に帰り、時機を見ては諸方に出て、力を蓄積して行く。

西方には、乞伏乾帰の衰えに乗じて勢力を拡大した秃髮（とうはつ）氏は建てた涼国がある。勃勃は秃髮氏に婚を求め、それを相手が断つたのを言いがか

りにして、二万騎で攻め入る。戦いつつ前進し、三百余里の間に一万余を殺傷し、二万七千人と牛馬羊数十万を奪う。

秃髮氏は怒り、帰還の途についた大夏軍を追撃する。両軍が激突して、勃勃の左腕に矢が立つ。勃勃は虎雀劍を抜いて、全軍の先頭に立って敵に向かう。大夏軍は勢いを得て、八十余里にわたって秃髮軍を追い、万に達する敵兵を殺戮する。帰るに際し、勃勃は敵の死骸を積んだ山を築き、髑髏台と名付ける。

勃勃が西方に忙しいと見て、姚興の將軍の張仏生が攻め来る。勃勃はただちに南に走り、青石原で秦軍を破る。捕虜にした五千余を斬る。

天王になってわずか数ヶ月、勃勃は全ての戦いに勝利し、周囲を恐れさせる。

**姚興**は、弟の忠告を聞かずに勃勃に朔方経営を任せたのを悔いはしても、

仏教三昧の暮らしは改めない。姚興が勃勃に差し向けた張將軍も、「仏生」と改名して、姚興の歡心を買って將軍の地位を得たのだった。

秦国は仏教に莫大な富を費やし、増大する戦費と相俟って、国家経済は破綻に瀕した。空っぽの国庫を補うために、ありとあらゆるものに税を掛けた。関所や渡し場で、塩、竹、材木といった日常品を通すたびごとに課税した。

「天殖の品は人民が生を養う抛り所であります。王たる者は万邦を子のごとくに育むと申します。節約に努めるより先に、民の利を奪うのはよろしくありません」。

大臣の忠告を姚興は聞かず、曲がった理を通す。

「関を越え、川を渡って物を動かすのは富豪の者たちである。富豪の余りあるところをもって朕の足らざるところを補うのに、なぜ不可なることがあるうか」。

姚興は、ただの一挙で局面を打開しようと、北と西に大軍を出す。西の秃髮氏を、共同で勃勃を討とうと誘い、秃髮氏が主軍を勃勃に向けたのを見て、

禿髮氏の本拠地に攻め入る。大国にしては卑劣な戦略に禿髮氏は怒り、秦は完敗して一万以上の將士を失う。

同様に、勃勃が禿髮氏と戦っている間にと、姚興は黄土高原に二万の兵を攻め入らせる。勃勃は抵抗せず、秦軍は行くところ敵なしで、好き放題に大夏国の土地を蹂躪する。秦軍は略奪に夢中になる。勃勃は、敵が十分奥にまで入って来たのを見計らって、潜めていた軍勢を一気に繰り出す。七千余人を擒にする。秦軍は四方に散った兵をあわてて集めて退却する。勃勃は総攻撃をかけ、一万三千を擒にし、大量の武器と軍馬一万頭を手にする。

大夏の大勝に北方の諸族はみな勃勃に靡く。

勃勃は阿利に虎雀劍を示し、

「この劍が余の手の内にあつて負けることはない。しかし、そちが言っていたように、この劍は天下一と言ふのには少し足りないようだ。これからの余の仕事のために、これを上回る劍を作ってくれ」。

「大王様が天下を一つにするのに、虎雀劍では不足であると、わたくしも承

知しております」。

「そちの夢もあるう。現在の我等の強みは神出鬼没の機動力だ。将来を見越せば、いつまでもそれだけではいられまい。攻めて勢いのあるときには強くとも、万が一にも守勢に立ったときには脆くも瓦解する恐れがある。そちの言うことを聞かなかった劉衛辰がまさにそうだった。余のために絶対に落ちない城を築いてくれ。そちの夢を叶えくれ」。

「何年の猶予をいただけますでしょうか」。

「十年では短すぎるか。十年の間は存分に暴れてみせる。天に昇ろうとする竜は、安易に木の枝に憩いはしない」。

「やつがれも年です。余り先のことをお約束できません」。

「必要とするものは欲しいだけ全て用意する。余を助けてくれたせめてもの謝礼だ」。

阿利は勃勃のもとから離れ、築城のための準備を始める。

**姚興**との戦いはなお長く続く。

龍昇二(四〇九)年、勃勃は高平の南の町、平涼を襲って七千余戸を掠め取り、依力川にまで軍を進める。

姚興は自ら兵を率いて長安を出る。双方とも直接の決着を望む。行軍中の姚興を勃勃が急襲する。虎雀剣を抜き、秦軍を蹴散らし、皇帝に迫る。敵は懸命に皇帝を守る。激しい抵抗に、勃勃は深追いは危険と退く。秦軍がそれに乗じて追う。激闘になる。勃勃軍に多数の死傷者が出る。秦軍が後から後から現れる。勃勃は防戦一方で孤立する。初めての敗戦かと思え、逃げ道を必死に探す。かろうじて高所を得て敵の矛先を避ける。地をどよもす音が響く。冷たい風が吹き来る。水しぶきが上がる。敵の軍馬が濁流に呑まれる。阿利が現れる。堤を切って秦軍を水で遮断し、退却路を確保したと言う。「そなたはどうしてここに来たのか」。

「夢に血にまみれた女が走り来て、大王様をこのようにして救えと申したのです」。

勃勃は天を仰ぐ。

——母を煩わせるようではまだまだだ。

翌年、勃勃は軍団を立て直し、必勝の戦術を携えて再び平涼より攻め入る。

姚興は自重して厳重に守りを固める。敵が出て来なければ、勃勃が率いる騎馬軍団の機動力は活かせない。秦国内を掠奪して帰る。

その翌年、青石原から南に出て、秦の諸城を攻め落とす。

一人の男が身を縛って勃勃の前に現れる。秦軍の中でも切つての智謀の士と知られる王買徳（おうばいとく）だ。勃勃の前にひれ伏して罪を詫びる。勃勃は縄を切る。

「余は禹の息子だ。顔上げて余を見るがいい」。

王買徳を試す。自分の言葉を信じない者は使えない。王買徳は一瞬だけ仰ぎ見て、すぐに平伏する。

勃勃は言う。

「禹を祖とする匈奴は長らく辺境の地に置かれ、余が生まれるに当たって流

離漂虜して滅亡の危機に瀕したのは、天が余に艱難を与えるためであった。いまや天運が開け、禹の業が再び興らんとするのを見るのは、禹の息子である余を天が地に使わした紛れもない証である。そちはこのことをどのようによく考えるか」。

王買徳は答える、

「晋が皇統を失つてより神器は南に移りましたが、天の光はかえつて北の朔野に下つて、武にして聖なること漢の高祖を超える王者を生み出しましたことに何の疑いがありますか。故にそれがしは大王様の前にかく参上いたしましたのでございます。それがしが思いますに、この天啓の機に、大業の建成されざることのあるうはありますがありません」。

「大業が成るのならば、余はこのまま長安に行くべきであらうか」。

「秦の政治は衰えたとはいえ藩鎮はなお固く、いましばらく深く力を蓄えるための時を必要といたしましたでしょう。後挙を図るべきであると思ひます」。

「まさに余の思うところだ」。



勃勃は、百城を得たよりも王買徳を得たのを喜ぶ。黄土高原より外に出て戦うには、新たな戦法を取り入れる必要がある。王買徳は武に優れるだけでなく、統治する能力にも優れる。国は軍団だけでは成り立たず、強い軍団にはよく治まった国がなければならぬ。

王買徳を得てより、阿利は勃勃のもとからすっかり消え、築城と剣作りに専念する。

三年後の竜昇七(四三三)年夏、勃勃は阿利とともに、かつての護送兵だけを連れて馬を走らせる。谷を渡り丘を越え、朔方水の北、黒水の南で、最後の坂を登る。

「はいでいいます」。

周囲より抜きん出た高台に立つ。

四方を見渡し、遮るものは一切ない。土と草と木が一体となった淡い黄緑

色がどこまでも続く。この視界の内に天下の全てがおさまる。

空には一点の雲もなく黒に近い青。その色の奥に、太古の昔から遙か未来までの時間が潜む。

中天に真つ赤な太陽が輝く。太陽は血まみれの女のほほえみだ。勃勃は腕を伸ばす。女も腕を伸ばす。指と指が触れる。

——この太陽の子だったのだ。

勃勃はここに赫連の姓を思い付く、

——赫（あか）るい日の光と自分は一つだ。

「ここなのだな」。

「ここ以外に考えられません」。

勃勃は阿利の肩を抱く。

「よくぞ見つけてくれた。大夏の全てを注ぎ込んでここに城を築こう。何も惜しまない。余は禹の子であり、あの太陽が母だ。天は永遠に落ちない。余の城も絶対に落ちない。不落の城だ。余は天下を統一し、この城より万邦に

君臨する。それが天が余に授けた使命なのだ。不落の城があるからには、天下には一切の戦がなくなる。天下の民のために、不落の城を造つてくれ。何も惜しんでならない。おまえが造る城を統万城と名付けよう。しかと頼んだぞ。

「この場所に到達するまで四年を費やしました。お約束の十年まであと六年。全力を尽くします」。

勃勃は護送兵に言う。

「ここに城が完成したならば、おまえたちはもう安楽に暮らしてくれていい。護送兵は「万歳」を叫ぶ。

築城は極秘裏に進められる。嶺北の民十万人が集められる。何のためであるかを聞かさねずに連れて行かれ、誰も帰れない。

阿利は城造りに執念を燃やす。太陽の子である勃勃の城は天下一の不落の城、そこに具える武器も天下一でなければならぬ。

阿利は工人に甲（かぶと）を示し、これを射抜く矢を作れと命じる。できた

矢を強力（つうりき）の者が射て甲を通らなると、工人を斬る。阿利は工人に矢を示し、これを防ぐ甲を作れと命じる。強力（つうりき）の者が矢を射て甲を通ると、工人を斬る。

阿利はかつてない城の構造を設計する。垂直に近い城壁を高く八方に巡らせる。七丈ごとに四丈の長さの突出部を城壁に設ける。城壁の上より見て城壁には一切の死角がなく、城壁に取り付く者を必ず狙い撃てる。

城壁は鉄よりも固くなければならぬ。黄土高原に緻密な岩は存在しない。土を固めて岩を作れと阿利は命じる。工人に錐を示し、

「これで突いて一寸でも入ったなら命はない」。

日干し煉瓦は錐で突けば粉々になる。火で焼いても錐が立つ。焼き具合をいくら工夫しても、工人は次々に斬られる。阿利は、積み上がった工人の死骸を土に投げ入れて捏ね合わす。焼くと固さが増した。阿利は配合を工夫し、上手に蒸すと、岩のように硬くなる。無数の工人が殺され、堅牢な城壁が積み上げられて行つた。

阿利は虎雀劍を超える劍を作ろうとする。どれほど工夫しても超えられない。何本もの劍を棄てる。阿利は劍だけには没頭できない。特に優れた工人を集めて劍作りを探究させる。

竜昇八（四二四）年、勃勃は思い付いた通りに、姓を劉から赫連に改める。同じ劉氏でも支庶には鉄伐の姓を与え、剛にして鉄のように鋭く、敵を伐るに堪える強い人間になれと命じる。

勃勃には天より与えられた使命がある。それを達成するために大夏国の人民は存在する。奉仕できない人間は不要だ。

太子と王后を定める。両者とも国の体裁として必要である。太子は没奕子の娘が生んだ長男だ。長男は、いくらか武将らしくなり、父に従順である。

——この者の他に誰もいなければこの者でもよい。

そのように思うだけで、天に与えられた使命を継ぐ者が長男であるとは考えていない。

——天より身を授かったのは一人、余だけだ。

王后に梁氏を据える。その美貌故に拾い出した女だ。

没奕于の娘が妻であったころの勃勃は辛抱に馴れていた。いまでは天より与えられた使命があるばかりで、人に従つて堪える必要はない。人並みでない堂々の体軀には人並みでない精力が漲る。制約がなくなれば、天に授かつたこの身に触れる幸運をなるべく多くの女に恵んでやろうとするのは当然だ。梁后には一切の身寄りが無い。史書を読めば、王后の親類が政治を乱した例は多々ある。梁后は子を産まない。王后に子がいると後継者争いを引き起こす。梁后は嫉妬しない。それが最も重要だ。梁后は勃勃の意によく適い、天の子である勃勃をそれに最もふさわしく飾るのを得手とする。勃勃の住いは、屋根を聳く茅は縁を切り揃えることもなかったという太古の宮殿とは程遠いものになる。

多数の女を近づければ、生まれる子は多い。長男とはいずれも年が離れて、延、昌、倫、定、満、安と、続々と子が生まれる。昌はなよなよとして勃勃とは似ても似つかない。そのせいか、この子ばかりは可愛らしいと感じる。

定は生まれたときからふてぶてしい顔つきで体も大きく、唯一将来を頼もしく感じさせる。それ故か、愛情は抱かない。

**竜昇九**（四一五）年春、秦の国力の衰えを見て攻め入る。杏城を落とす、敵兵二万を生き埋めにする。秦軍の弱さに、王買得は、むしろ急ぐ必要はないと言う。勃勃も、楽しんで待つがよいと判断し、引き揚げる。

竜昇十（四一六）年元旦、秦国皇帝の姚興が太極前殿に姿を現わすと、一人の僧が突然に号泣する。居並ぶ群臣は縁起でもない、僧を抑える。僧は体を激しくねじって泣き続ける。その僧は、数々の予言で姚興の心を捉え、常に皇帝の近く控える者だ。

二月、姚興は死んだ。五十一歳だった。後を継いだのは長男の姚泓である。姚泓は孝友寛和と評せられ、人となりはまことによろしいが、国難に対処できぬ人物ではない。

六月、勃勃は四万騎を率いて秦の上邽（じょうけい）を襲う。二十日間で落とし五千余人を殺す。陰密（いんみつ）を攻めて一万余人を殺し、安定を攻めて降伏させる。勃勃がさらに前進すると、秦軍が反撃に出る。勃勃はひとまず安定に退こうとする。安定が再び秦に寝返って退路が塞がれる。勃勃は迂回路を得て杏城に帰り着く。

「少々危うい目に遭ったのは、ここは休んでいよと天が示すのであろう」。

勃勃は北に帰ると言う。

將軍は驚いて口々に言う。

「今回、退却したのはいったん態勢を立て直すためであります。敵に敗れたわけではありません。いま一度前進すれば長安を取るのは難しくありません」。

「姚泓には秦を保つ力がありません。我等が取らなければ、みすみす劉裕（りゅうよ）に渡してしまふことになりかねません」。

劉裕は晋国の將軍だ。晋は元来は中国全土を支配していたのだが、五胡の圧力に屈して領土の半分を失った。失地回復は晋の悲願だ。軍事的天才とし



て急速に頭角を現した劉裕は、秦の衰えを見て、北伐の準備を進めている。

勃勃は笑って言う。

「諸君が思う通り、余がここで引けば、必ず劉裕が出て来る。劉裕の胸には世に優れた計略があり、姚泓には一族をまとめる力もない。劉裕が勝つのは必定だ」。

「その前に、長安を我等が取るべきではないでしょうか」。

「大事を定めるときには、天の時を見なければならぬ。余が天の時を得ているのならば、やすやすと長安への道を行んでいただろう。まだ早すぎるのだから」。

將軍連中が納得しないのを見て、勃勃は王買徳に言う。

「君はどう思うか」。

「大王様のおっしゃる通りであります。我等はいつまで待つのか。劉裕が南に帰るまでであります。劉裕の北伐の真の目的は長安を取ることにあるのではなく、皇位を手中にすることにありますが」。

勃勃は膝を打ち、

「余の意を知る君ばかりだ。劉裕は、一瞬だけ長安に入れればいい。長安の奪還を果たせば、劉裕にものが言える人間は晋には一人もいなくなる。劉裕は南に凱旋して皇帝になろうとするだろう。皇帝になる望みを叶えたならば、劉裕には長安は無用だ。いま急いで長安に兵を進めずとも、少しを待てば、塵芥を拾うよりもたやすく長安が手に入る」。

勃勃は引き上げ、劉裕の北伐を静観する。

竜昇十一（四二七）年元旦、秦国皇帝の姚泓は太極前殿において泣くより他に何もできない。内においては一族が離反し、外においては迫り来る劉裕に對しなすすべがない。

八月、劉裕の北伐軍が長安に接近する。姚泓は抵抗せず、あっさり降伏する。姚泓の子の仏念が、皇帝としての矜持を保ってせめて自害するよう父に言う。皇帝は拒否し、仏念は高殿から身を投げて死ぬ。十一歳だった。

劉裕は長安に入った。晋の將軍が長安に入ったのは百年ぶりだ。五胡の支

配に苦しんで来たこの地の漢人は涙をもって劉裕を迎えた。

劉裕は大夏国に使者を送る。晋と夏は和を結び、同じ劉姓として劉裕と劉勃勃は兄弟になろうと言う。

使者を迎えるために、勃勃は入念に準備する。梁后が衣裳を考案し、長安出身の漢人に漢語の正しい発音を習う。

古代の帝王の宮殿に似せた簡素な建物で使者に会う。劉裕からの書を一読すると、使者の面前で返書を口述する。筆を執って記すと立派な文章になる。

劉裕は十二月に南に帰り、二男の劉義真を長安に残す。このとき十一歳である。

勃勃は王買徳に言う。

「事は君の思う通りに運んでいる。長安を取る方策を立てくれ」。

「一年後に長安は我等のものになります」。

竜昇十二(四一八)年十一月、勃勃は長安に入る。王買徳の計画とのわずかな違いは、劉義真がすぐには逃げずにぎりぎりまで抵抗したことだけだった。

長安に通じる最後の道で難渋させられ、勃勃は怒りのあまり、敵の人頭を積んだ京観（けいかん）を長安近郊に築いた。

——ここもやはり余のものになった。

それ以上の感慨はなかった。天から身を授かった者として、思い通りに得られなかったものはこれまでに何もなく、それに一つ付け加わっただけだ。

秦の皇帝が座っていた玉座に身をおさめ、

——天下も自ずと余のものになる。

そう思った瞬間に、背筋にぞっと冷たいものを感じて立ち上がる。

——うっかり秦の皇帝どもに成り下がるところだった。

勃勃は、玉座を隅に押しやり、床几に掛け、祝宴を開くよう命じる。

杯が巡ると、王買徳の功績が最も大であると称える。王買徳は、長安を得たいまこそ、皇帝として即位すべきであると勧める。

勃勃は、徳の薄い自分は皇帝にふさわしくないと、断る。過去の王朝の創業者は、臣下に即位を勧められると必ず断った。史書を好む勃勃は、どのよ

うに振る舞い何を言えばよいかをよく心得ている。勃勃は型通りの断りの文句を口にしつつ、それが本心であるかのような気分になる。

王賈徳は、過去の例に倣って再び勧める。一人ではなく、他の將軍連中と声を合わせる。勃勃は断る。次に太子を先頭にして人々が勧める。勃勃は断る。二回、三回と辞退するのがお定まりだ。皇帝となるような者は謙讓の美德を具えていなければならぬ。

勃勃は次第に不愉快になる。無駄な決まり事をするのが不快なのではない。思っていないことを口にするが不快なのではない。断るうちに、皇帝になる気がどんどん失せてしまうのだ。

長安の宮殿こそは皇帝の居場所として最もふさわしい。長安を取ったいまが即位する絶好の時機だ。勃勃もそのように思いはしても、身をもって感じるのではない。黄土高原で天王となったときとまるで違う。

大勢の兵士が宮殿の周りに整列して皆で即位を勧める。

——阿利がここにいれば、こうはならぬだろう。

勃勃は、このようになってまで即位しないのはありえないと知っている。まさしく不承不承ながら、人々の願いを入れて即位しようと思える。宮殿に万歳の声が満ちる。

灞上に壇が築かれて、即位の儀が行われる。皇帝となって天を仰いでも血まみれの女は現れない。

王買徳の勧めで、昌武と改元する。

翌年の正月、元旦の儀を行う。皇帝としての重要な儀式である。勃勃は、宮殿もそこに居並ぶ太子も王買徳以下の臣下も煩わしく感じる。

定め通りに儀式が終わると、王買徳は、国家の大計を臣下にお授けくたさいと願う。

予定された段取りであったが、勃勃は、  
「それは君に任せよう」。

懸命に感情を抑え、押し殺したような声でぼそりと言う。

王買徳は意外な面持ちながらも、天下統一に至る見取り図を語る。

勃勃はにわか立ち上がり、

「もうよい。それは君に任せる。朕は、明日、北に帰る」。

王買徳は声を失う。

太子が尋ねる。

「長安を得たばかりでなぜでありましょうか」。

長安攻略に当たって太子は大きな手柄を立てていた。父に認められようと懸命に戦って最後の激戦を制し、それが自信になっている。

勃勃は不機嫌さを一切隠さない。

「なぜわからぬのだ」。

足音高く宮殿の階を下る。太子以下、檀上の人々はあわてて下におりる。

勃勃はかつての護送兵を呼び集め、宮殿の外へと足早に進む。

「長安は歴代の帝王の都であった。肥沃にして堅固、都としてこれほどふさわしい場所はない。晋は遠くにあつて恐れる相手ではない。目下の最大の敵は魏だ。魏は大夏と同じ風俗を有し東と西に境を接している。朕がここ長安

にいと、魏は隙ありと見て、兵を西に進めて高原の地を取りに出るであろう。万が一にも我が大夏が高原を失えば長安は保てない。朕に高原がいる限りは、魏は高原を取りには出られない。たとえ魏が長安を奪ったところで、朕が高原から打って出るならば、長安はたやすく取り戻せる。朕は高原にしなければならぬ。だから北に帰る」。

護送兵は勃勃の明察を讃える。

「明日まで待てぬ。いますぐだ」。

太子と王買徳を残して、勃勃は長安を発つ。

**春**の草が芽生えて、緑が南から北へと広がるのを追うようにして勃勃は黄土高原を進む。

「諸君によいものを見せてやる」。

いくつもの台地を越えた先が目指す場所だ。



かつての護送兵以下、付き従う者は我が目を疑う。幾度目をこすつても、それは幻ではない。春の日差しを受けて紅色に輝く壮麗な城がある。高原にこのような城があつたとは誰一人として知らない。

城壁の高さは十仞、その上に、五仞の宮牆が巡らされ、それを凌いで聳える幾つもの台榭がある。飛閣が相い連なり、金銀銅の飾りがまばゆい。

「万邦に君臨する統万城だ」。

勃勃は人々を城の内に連れる。

銅を鑄た巨大な大鼓が鳴り響いて阿利が出迎える。

宮殿へと続く道に、神獣の巨像が並ぶ。いずれも黄金で飾られている。

宮殿の奥に梁后が待っている。勃勃が玉座に就く。しつくりと身がおさまる。人々が万歳を唱える。

阿利が一振りの剣を差し出す。

「ようやくできましてございます」。

勃勃が覆いを取る。白刃が現れ、光がほとばしる。

「この剣を陛下がお振るいになりますと、草が風に靡くごとくに九区は陛下の威服に従うでありますよう。」

「剣の名は何という。」

「竜雀剣にございます。」

勃勃はうなずく。天に上る竜だ。

「そなたもよく見るがいい。」

勃勃は剣を梁后に渡す。梁后はじつと視線を注ぐ。

「どうだ、そなたの目で見ても、天下一の剣であろう。」

勃勃は腰に佩く虎雀剣を抜く。

「これも優れものだが、そちらには適うまい。」

虎雀剣も光を放ち、二つの光が宮殿の中で妖しく交差する。

梁后の目からすつと涙が落ちる。剣の光に目を奪われて、その涙に誰も気付かない。

梁后の持つ竜雀剣の光が一瞬だけ翳る。しかし、すぐに輝きを取り戻すと、

見る見る強くたつて虎雀剣を圧倒する。虎雀剣は光を失つて暗く沈む。阿利は唇を噛む。

「ついに虎雀剣を超える剣を作ったのだな」。

勃勃は虎雀剣を納め、阿利を讃える。阿利は無言で頭を下げる。

勃勃は梁后より童雀剣を受け取り、

「今日からはそなたがこれを持って」。

代わつて虎雀剣を渡す。

「これも阿利様のお作でございますか」。

「この童雀剣ができるまで、それが阿利の自慢の名刀だった。童雀剣を朕が携え、虎雀剣はそなたが携える。まことによい一对の剣ではないか」。

梁后は氷のような眼差しを阿利に向ける。

勃勃は繰り返して阿利を褒め、

「この剣といい、この城といい、大儀であった。ここ二十年余り、そなたは命を削つて働いてくれた。感謝する」。

阿利は平伏し、

「老いが迫るこの身にして、この大業を成し遂げられましたのは、ひとえに陛下のご威徳によるものでございます」。

「これからはゆっくりと余生を送るがいい」。

「まだまだ身を削ってお仕えする所存にございます」。

「そなたにはどこがよかるうかと考えていた。高平ではどうだ。いずれあそこは倫に任せるつもりだ。あれが成長するまでの間、高平で教え導いてやってはくれないか」。

「皇子様をご指導するなど、そのような大役はとても務まりません」。

「高平で呑気に暮らしてくれていい。倫が何かまずいことをしたら叱ってやってくれ」。

阿利は繰り返し辞退するが、実のところは統万城から離れられるのをむしろ秘かに喜ぶ。

城の周囲には阿利が殺した無数の死霊がさまよっているとされる。龍雀

劍は阿利の作ではない。竜雀劍を作ったのは、梁翼という一人の工人。梁翼は劍作りに打ち込むために妻子を棄てて諸国を巡り、統万城の建設現場の鬼気迫る雰囲気に、ここでならよい劍が作れると考えた。阿利は梁翼が作った劍を見て、猛烈な嫉妬心から、梁翼を殺して劍を自分のものにした。

梁后は幼いころに出て行った父の顔は覚えてはいなかったが、竜雀劍の光に父の作であると知った。二つの劍の光の交差から、父が阿利に殺されたのも知った。

**統**万城の存在が四方に知れると、大夏国の境を侵そうとする者はいなくなつた。

勃勃が獐猛であるのは十分に鳴り響き、敢えて虎の尾を踏む蛮勇の持ち主がいて、幸いにも勝利して大夏国に攻め入り、黄土高原の奥のまた奥へと進んだとしても、最後には統万城に挑まなければならぬ。勃勃が静かに統万

城におさまっていてくれるのなら、手出しをしなみに限る。

大夏国に平安が約束され、勃勃は、統万城の高樓に登って四方を眺める以外にすることがない。遙か地平線の向こうまで目を凝らして、見渡す限りの天下には何事もない。

——統万城があるから天下はかくも鎮まっている。

頭上に輝く太陽は、勃勃が太陽の子だという事実の証であるところの赤い光を注いでいる。竜雀劍を抜けば、白昼でも四方に光を放つ。勃勃の威光は間違ひなく天下に及んでいる。

勃勃に一つの新たな想念が湧き、すぐに確信に変わる。

——朕の命令を聞こうと、諸国の偽皇帝どもが間もなくやって来る。朕は、連中がひれ伏すのをここで待っていればよい。

統万城の北の門を平朔門、西の門を服涼門、南の門を朝宋門、東の門を招魏門と名付ける。北の門からは北方の蛮族の長が、西の門からは涼国の王が、南の門からは晋に代わった宋国の皇帝である劉裕が、そして東の門からは宿

敵の魏国の皇帝が、それぞれ勃勃に服従するために入って来る。

——朕は天の子、太陽の子だ。誰にもできないことも、朕には容易に当たり前のこととして起こる。

十歳のときにたった一人で逃げてからのことを振り返れば、勃勃以外の誰もができないことばかりだ。天下統一の偉業も、普通には起こりえない仕方  
で成し遂げられると、勃勃は信じる。

戦場で命をかけて駆け巡っていた者が、事もなく日々を過ごすようになれば、自ずと奢侈と酒色に耽溺するようになる。

人民は天の子である皇帝に虐使され、統万城を築くために犠牲になった方をもつて数える死霊に、日々に新たな仲間が加わってとどまることがない。

昌武七（四四）年、梁后が青い顔で駆けて来て、勃勃の前に、虎雀剣を差し出す。

「何事であるか」。

「申し訳ありません。お預かりしましたこの大切な剣、毎朝、欠かさず到手

入れをしておりましたところ、どうしたことでありましょうか、今朝はこのようになっているではありませんか」。

梁後は身を震わせる。

勃勃が手に取って引き抜くと、刃が現れるより先に、赤い液がこぼれる。

「何だ、これは」。

「恐らくは人の血でござりましょう」。

勃勃は指で拭って匂いを嗅ぐ。

「誰の仕業だ」。

西方より来ていた術者に占わせる。

「これは怨恨。そのもとをたどりますと、南の方角にございます」。

「南とな。あちらに朕を恨む者が多くいて不思議ではない。朕を恨むのは、天に逆らうのと同じだ。恨む者には恐ろしい罰が下ろう」。

しばらくして、長安から秘かに走って来たという者を、梁后が連れる。太子が謀反を企んでいると言う。



「あれは気の小さい従順な奴だ。大それた企みをするはずがない。王買得もついている。不届き者が朕を惑わせようと悪い噂を流しているのだろう。」

梁后は言う。

「誰か不届きな者が、高平のことをお耳に入れたのではないでしょうか。」

勃勃はむつとする。

太子の母を焼き殺したことは太子に知れぬようにしていた。勃勃を今日まで導いたのは、手を差し伸べる血まみれの女。母は恐らくは劉衛辰に殺された。

「あれには朕と同じ真似はできない。」

そうは思いつつも、没奕子にあくまでも従順であった自分を顧みて、王買徳に事実を問いただす使者を送る。

太子は、王買徳を殺して反旗を翻す。七万の兵を率いて北に打って出て高平を奇襲する。阿利と倫を殺して、無残な最期を遂げた母と祖父の霊を祭る。

勃勃は怒り、太子を討つ準備を進める。

定が言う。

「愚かな兄を成敗するくらいのは、私にお任せください」。

定はまだ十代の前半だ。最も自分に似る息子がどのようにするのかを見るのも悪くはあるまいと、

「よし、思うがままにやってみよ」。

梁后が勃勃の裾を曳いてささやく。

「次の太子はどなたになさるおつもりなのでしょうか」。

勃勃ははつとする。

勃勃は愛する昌を考えていた。定がここでいち早く武勲を挙げれば、定は自分こそが次の太子にふさわしいと考えるかもしれないし、將軍たちも定を次の太子にと望むかもしれない。

「しかし、あの昌にはなかなか任せられまい。ならば、朕が昌を連れて行くか」。

「不始末を仕出かした息子を成敗するだけのために、お上がわざわざお出ま

しになったのでは、他国の聞こえもよろしくありませんでしょう。皇子様にお命じになるので十分なではありませんか」。

以前なら、太子が長安で反旗を翻した時点で、即座に勃勃は馬を走らせていたのだろうが、統万城を出るのがいささか大儀で、自ら行くのをこれまで渋っていた。梁后が言うのはなかなかにもつともであると思い、

「では、どうするのがよかろうか」。

「昌皇子様を総大将にして、定皇子様を副将にされてはいかがですか」。

「そうか。そうするのがよかろう」。

二人の息子に勇猛な將軍を添え、阿利の仇を討てと命じて、統万城から八万五千の大軍を送り出す。

阿利も王買得も太子に殺され、もとの護送兵はかねての約束通り、城の完成を機に隠居してそれぞれが望むところに行った。勃勃が何かを相談する相手は梁后しかない。

梁后が、虎雀劍が元通りになったと勃勃に見せに来た日に、太子は敗死し、

その首が統万城に届けられた。

勃勃は、阿利と王買得の霊の前に太子の首を供え、罪状を数えて、首に刑罰を加える。

昌を太子にし、前の太子と同様、長安に送り出そうとする。梁后が止める。

「再び同じようなことになったら取り返しがつきません。前の太子様も、誰か不届きな者が間に入らねば、あのようなことにはならなかったではありませんか」。

「昌は朕の近くに置くのがよいか。とはいえ、長安は重要な場所だ。太子でなくては適うまい」。

「定皇子様がいらつしやいましょう」。

父に呼ばれて、定は言う。

「父上はご自分のおっしゃったことをお忘れになったのですか。長安は二の次です。兄上にこの統万城を使いこなせましょうか」。

勃勃は、定が言うのにも一理あると思いつつも、定が自分に似ると見えて、

不快になる。

梁后がその耳に囁く。

「新しい太子様をどうなさりたいのですか」。

勃勃は定に言う。

「いかにも朔方が第一で長安は二の次だ。だからと言って長安を軽んじてはならない。昌とおまえを比べて、武に優れるのはおまえだ。昌にこそ守りに強いこの城が必要だ。おまえは長安に行き、いつか朕が魏や宋を成敗するための準備をしろ」。

大夏国が内紛で乱れた間も、周辺諸国は国境を侵すことはなかった。統万城が存在するからだ。

**勃勃**が統万城を出るのを大儀と感じたのには少々理由があった。自分では決して認めたくはないのだが、体が年々衰えて来ているのだった。

以前であれば、一晚に幾人もの女を渉猟して疲れると言うことはなかった。順に女を巡って、最後には梁後の部屋におさまって休むのだが、朝目覚めて、そこがどの女の部屋で、どうしてそこにいるのか、わからないようなことがある。ぐったりとなつてどこかで眠つてしまふ。起きて体がずっしりと重く、不快な感覚が一日まとわりつく。酒を飲むとそれは払拭され、女たちの部屋を巡る力が湧いて来る。

ある夜、本意でなく自制して、早い時刻に梁後の部屋に入る。ぼったり横になると、早くもうとうとする。梁后がすすり泣きを始める。

勃勃はむつとして、

「朕は静かに休みたいのだ。邪魔をするな」。

梁后は床に伏し、

「私めはお上のおそばにお仕えしてもはや何のお役にも立ちません。いっそお棄てになるなり、死をお命じになるなり、なさってください」。

勃勃はむつくり身を起こし、

「何を言い出す」。

「近頃は、他の女たちが若く美しく輝いているのを見ますと、羨ましくてなりません。以前にはそのようなことは思いもしませんでした。いまではもう胸が焦げるようです。そのような悪い心を持つ私めを、どうか罰してください」。

「朕はそなたを最も大切にしている。他の女とは違う。そなたはいまも若く美しいではないか」。

「お上は太陽のお子にございます。永遠に輝き続ける太陽と同じく、お上の若さは永遠でございます。他の女たちがいつまでも若く美しいのは、お上よりその永遠の若さを頂戴しているからでございます。私めは、ここしばらくそれを頂戴することもなくなってしまうました。私めがこんなふうにつきり年老いてしまったからでございます」。

梁后はさめざめと泣く。

勃勃は梁后に愛おしさを覚える。他の女はただ快樂を与えてくれるだけで、

梁後の他に安らぎを与えてくれる者は誰もいない。

勃勃は梁後の涙を拭って抱き寄せる。しかし、その晩の精はすでに尽き、梁後に永遠の若さのもとを与えられない。

「太陽のお子がどうなさったのでしよう」。

梁後は勃勃の身を愛撫しつつ、太陽の輝きから作ったという西方伝来の秘薬を勧める。それを燻して服すと、俄かに漲るものがあり、梁後に若さの精を与えられる。

勃勃は薬の効力を喜び、毎晩服すようになる。日々に若さが戻り、煮え立つばかりの活力に、昏間は、統万城の最高楼へ幾度となく駆け上る。

四方を眺め、

「あいつらはどうしてまだ来ぬのか。何をしているのだ。朕がここで待っているというのに」。

苛立ちは日に日に募る。

梁後は言う。



「偽の皇帝どもが来ないのは、このお城のすばらしさがまだ十分に知られていないからではないでしょうか」。

「どうということだ」。

「不落の城であるのを誰の目にも明らかにしてみせましょう」。

「誰か攻めて来ればただちにそうしてみせるのだが、ここが完成してから、誰も来ない」。

「攻めさせたらいいではありませんか」。

「誰に攻めさせるのだ」。

「最強の軍団にです」。

勃勃はにわかに興奮する。

「この城を造ってくれた阿利のためにも、不落の城であることを証明しよう」。

勃勃は將軍を呼ぶ。天下で最強といえは大夏国の軍団だ。

「そちに千騎を与える。南の城壁を攻撃しろ。もし統万城を攻め取ったら、そちが大夏国の皇帝だ」。

將軍は奇妙な命令にとまどうが、千騎を連れて城の外に出る。

「お上はご退屈なのだろう。お上のお心に適うように振る舞えば、褒美が頂戴できるであろう」。

將軍は、美々しく飾った千騎に城の下で威風堂々の行進をさせる。

勃勃が城壁の上に姿を現す。將軍は太鼓を盛大に鳴らして、城攻めの命令を出す。

鬨の声を上げて騎馬武者の一隊が城に駆け寄る。城壁の真下に来て、上に向かつて一斉に矢を射る。矢は壁の途中にまでしか届かない。壁は矢を受け付けない。將軍は順に部隊を繰り出して、華々しく矢を放つ。

それが終わると、様々な攻め道具を取り出して壁に取り付かせる。兵士が壁に群がる。梯子を架け、縄梯子を投げ、壁を上ろうとする。緻密に積み上げられた城壁は容易に上れない。

「そんなことではだめだ。もつと本気を出せ。これは遊びではない、戦だ」。

勃勃が怒鳴る。

將軍は、梯子を継いで上らせる。下から三分の一にまで達する。

「何をぐずぐずやっていっているのだ、それで城が攻め落とせると思っているのか。上からただ手をこまねいて見ていられるだけはないのだぞ」。

勃勃は弓を取って身を乗り出し、最も高いところに来ていいる兵に狙いを定める。ひようと放つと、矢が首に立ち、兵士は落下する。

下にどよめきが起こる。

「何を驚いている。これは遊びではない、戦だと言ったではないか。一斉に射て思い知らせてやれ」。

多数の矢が放たれる。どれもが本気で射たものではなく、中空で勢いを失って落下する。

「それで城が守れるのか」。

勃勃は剣を抜き、弱い矢を放った一人を斬る。

「もう一度、射よ」。

今度は壁に取り付く者に当たり、ばらばらと死骸になって落ちる。

下の兵士は大慌てで一斉に壁から離れる。

「もう退散か。全くなつていない」。

勃勃は將軍を呼び付け、首を刎ねる。

翌日、勃勃は北の門を攻めさせる。任務を与えられた將軍は、前日よりはいくらか攻め方を工夫するが、やはり首を刎ねられる。

翌日は東の門。將軍は、城攻めの兵士の後ろに、槍を持った兵士を立てせる。上から飛び来る矢に恐れて逃げようとする、下から槍で突く。兵は死にもの狂いで壁にしがみついて上るしかない。

「ようやく、本物の戦らしくなった」。

その日の將軍は、多数の戦死者を出して城攻めには失敗したものの、鞭で打たれただけで赦される。

翌日は西の壁。勃勃は梁后を初めとする後宮の女や幼子たちを城壁の上に乗べる。

「いざとなれば、身の周りに一人の兵もいないときもあるう。自分の身は自

分で守るしかない」。

それぞれに弓矢を渡し、

「射てみよ」。

真つ先に梁后が放つ。兵の肩をかすめる。勃勃は梁后を褒める。

弓を持ったまま射ることのできない女を見つけると、

「おまえのような者が国を滅ぼすのだ」。

したたかに殴る。

城攻めの兵士は前日に増して必死になって壁に取り付く。死骸が山積みになる。その日の將軍は、最後の一兵が殺されるまで攻撃を続けたために、罪を免れる。

「どうだ、確かに不落の城であろう」。

勃勃が梁后に向かって言うと、

「決して上つて来られないとわかっている相手を射ても、実戦に役立つとは思えません」。

「成程、それもそうだ」。

翌日は、城門をわざと開け、そこから敵が乱入してくる戦闘場面を実演する。

日々に状況を変えて、勃勃は殺戮を楽しむ。

「城攻めの最後は宮中での白兵戦だ。敵がどこまで入り込もうとも、朕とそなたが倒れなければ、大夏国は亡びない。そなたも剣を持ち、心して闘え」。

勃勃と梁后は阿利が作った最強の鎧兜で身を固める。

「この鎧に克てるのは、そちの持つ虎雀剣と、朕の持つ竜雀剣だけだ。その二剣がこの手の内にあるのだから、我等は敵なしだ」。

「確かに鎧に身は守られましょうが、敵を斃さなければ勝てないように思います。腕弱のこのわたくしにも人が斬れるでしょうか」。

「剣がよければ自ずと切れる。虎雀剣では心もとないというのならこの竜雀剣を貸そうか」。

「とんでもございません」。

「力のないそなたが竜雀剣を使い、朕が虎雀剣を使う。それでちょうどよいではないか」。

勃勃は梁后と剣を交換する。

鬨の声を上げて兵が駆け入る。二人だけである程度戦い、しばらくすると、味方が来て敵を退けるといふのがこの日の段取りだ。

勃勃は虎雀剣を抜く。刃の放つ光に、全身の血が湧き立つ。襲い来る兵の目が眩む。勃勃は斬る。一人を斬ると刃の光が増し、また一人を斬る。

「そなたも来い」。

勃勃は振り返って梁后を促す。その隙に一人が斬り込む。身をかかわすが、右腕に剣が当たる。阿利の鎧が跳ね返す。

「これぞ戦だ」。

勃勃は血が沸騰するばかりに興奮する。力任せに相手を斃す。

背中に輝きを感じる。梁后が竜雀剣を抜いたのだ。

勃勃の右腕が急にしびれる。先程剣が当たったせいなのか。虎雀剣を握る手

に力が入らない。敵が正面から向かって来る。虎雀剣を左手に持ち替える。虎雀剣は光を失っている。勃勃は狼狽する。

梁后が前に躍り出て、竜雀剣を振るう。白光とともに相手は二つになる。「よくやったぞ」。

勃勃の言葉に梁后が振り返る。

勃勃は梁后の笑みを見る。そのときに、竜雀剣の先端が胸に突き当たる。

梁翼の剣は阿利の鎧を貫く。しかし、梁翼の娘の力はわずかに及ばない。

阿利の剣が光を取り戻し、梁后の首が宙に飛ぶ。

**梁后**を失った勃勃が信じるのは薬だけ。飲めば、まさしく自分は太陽の子であって、何でもできると感じられる。薬が切れると、身の置き所のない苦しみにどうすることもできない。

梁后のようにいつ誰が剣を突き出して来るのかわらない。おかしな視線を



向けて来たと感じると、ただちにその者の眼を穿つ。おかしな笑いを向けて来たと感じるとその唇を抉る。おかしな口をきいたと感じるとその舌を抜く。戦の真似事は、勃勃が思い立つと繰り返される。壁に埋め込まれた工人が、自分の場所に死者を誘うとの噂が流れる。兵士は皇帝に命じられて順に死んで行く。

昌武八（四五）年。その年の秋はなお厳しい暑さが続き、この日はとくに太陽がぎらぎらと輝いていた。

兵士は関の声を上げて城壁に駆け寄り、勃勃が上に姿を現わすと、人々は息を呑む。

素つ裸で全身を真赤に塗っている。

——朕は太陽の子。太陽は身に何も纏わない。阿利が作ったどの鎧よりも朕の肉体は堅牢である。

手には何も持たない。

——朕は太陽の子。天から授かったこの身は、これだけで完璧である。

城壁の上に聳える五仞の宮牆の上に立って、

——朕は太陽の子。すなわち太陽である。天に向かって飛び、太陽と一体になる。

勃勃は、中空に血まみれの女を見る。腕を差し出し、身を翻らせる。

「朕は天である」。

下の兵は一斉に槍を突き上げる。勃勃は身を貫かれて死に、死骸はたちまち細かく刻まれる。

**翌**年の冬、黄河が氷結するのを待って、魏の皇帝は二万の軍勢を率いて大夏国に攻め入る。魏軍は統万城から三十里に迫る。

大夏国の二代皇帝赫連昌は城を出て一戦を交えるものの、もろくも敗れ、統万城に逃げ込む。魏軍の武将がその後について城に入り込み、西宮に火を放つ。

魏皇帝は統万城を間近に見て、

「確かにこれは不落の城である」。

と感嘆し、本格的な城攻めはまたこの次だと帰還する。

時を同じくして、魏は長安を攻め、長安城内に、統万城はすでに陥落したとの噂を流す。

「だから、兄貴には統万城は使いこなせないと言ったのだ」。

赫連定は敵の包囲網を破って統万城奪還に打って出る。黄土高原にすでに魏軍の姿はなく、その間に長安は魏に落ちる。

翌年、定は長安を取り戻すべく二万の兵で魏と戦う。父に最も似る定の戦いぶりは激烈であった。

魏皇帝は、主力を統万城に向ける。今度は九万の大軍を率いる。魏皇帝は軍勢の大半を深い谷に隠し、城を攻めあぐねて難渋する有様をわざと敵に見せる。食糧不足に陥って苦しんでいるとの噂を流す。

昌が城より打って出ると、魏軍はそのたびに敗れて後退する。昌は勝利を

重ねて気をよくし、一気に敵を追い返してしまおうと、三万騎を率いて城を出る。魏皇帝は昌を統万城から遠くにおびき出し、大軍を一斉に繰り出す。

昌は大敗し、大夏国軍はばらばらになって我勝ちに城に逃げ帰る。魏皇帝は自らその中に混じって敵城に入る。城内の混乱に乗じて、城門に魏の旗を掲げる。遅れて戻って来た昌は、魏の旗を見て、統万城はすでに陥落したと勘違いし、南に走る。城内に入った魏兵はごくわずかで、魏皇帝はあやうく殺されかけ、女の着物に身を隠して城を脱出する。

翌朝、統万城の四方の門が開け放たれる。昌が逃亡して、残った人々に戦う意思はなかった。

魏皇帝が改めて入城すると、宮殿は奢侈を極め魏の宮殿の比ではない。後宮には方を数える女がいて、その調度品は魏皇帝自身が用いるものをしのぐ。府庫には数えきれない珍宝が積まれる。

「草原の小国にして民をこのように虐使して亡びまいとして亡びぬことができようか」。

魏皇帝は深く嘆息する。

統万城陥落の報せに、定は勢いを失い、西に逃れる。

翌年の夏、昌は起死回生の決戦を魏軍に挑むが、戦闘中に落馬して擒になる。

定は西方の地で大夏国の三代皇帝として即位し、翌年の夏、統万城奪還を目指して東に軍を出す。しかし、途中で阻まれ、苛藍山より遙か統万城の空を見て号泣する。

「父が統万城の跡継ぎを誤らなければ今日のこのようなことがあつたらうか」。

定は、統万城奪還に執念を燃やし続けたが、父と同様に勇猛であるとともに、酷薄さも父親譲りであつたために、従う部下が次第に減り、父の死から六年後の夏に、匈奴の民十万を連れて西に移動するところを襲われて囚われの身となる。

昌は魏皇帝に気に入られてその客分として厚遇され、定は魏の都で斬られ

た。

昌は統万城を使いこなせなかったが、築城から千年以上もたった明の時代になって、統万城が真に不落の城であることが証明された。そのころは寧夏城と呼ばれ、城壁は鉄で打てば火花の散る堅さを保っていた。反徒がそこに立て籠もり、官軍が包囲して水を注ぐなど三ヶ月の間攻め続けて、ついに落とせなかったという。